

公開資料

社会技術研究開発事業  
「科学技術と人間」研究開発領域  
研究開発プログラム「科学技術と社会の相互作用」  
研究開発プロジェクト  
「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」

## 研究開発実施終了報告書

研究開発期間 平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

研究代表者氏名 大井 学

所属・役職 金沢大学人間社会研究域学校教育系、教授

## 目次

1. 研究開発プロジェクト .....	1
2. 研究開発実施の要約 .....	1
2-1. 研究開発目標 .....	1
2-2. 実施項目・内容 .....	2
2-3. 主な結果・成果 .....	2
2-4. 研究開発実施体制 .....	4
3. 研究開発実施の具体的内容 .....	5
3-1. 研究開発目標 .....	5
3-2. 実施項目 .....	5
3-3. 研究開発結果・成果 .....	7
3-3-1. LCCCA モデルの社会実験を通じての提案 .....	7
3-3-2. LCCCA モデル形成に至る各取り組みとその成果 .....	9
(1) 対話の場の構築 .....	9
(2) 社会の自閉症へのまなざしの解明 .....	16
(3) 共生と治療の調和原理の考究 .....	19
(4) その他の取り組み（大学生向け取り組み） .....	21
<本プロジェクトにおける、ワークショップ等の一覧> .....	21
3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況 .....	31
3-5. プロジェクトを終了して .....	32
4. 研究開発実施体制 .....	33
4-1. 体制 .....	33
4-2. 研究開発実施者 .....	33
4-3. 研究開発の協力者・関与者 .....	36
5. 成果の発信やアウトリーチ活動など .....	39
5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など .....	39
5-2. 論文発表 .....	42
5-3. 口頭発表 .....	45
5-4. 新聞報道・投稿、受賞等 .....	50
5-5. 特許出願 .....	53

## 1. 研究開発プロジェクト

- (1) 研究開発領域：科学技術と人間
- (2) 領域総括：村上 陽一郎
- (3) 研究代表者：大井 学
- (4) 研究開発プロジェクト名：「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」
- (5) 研究開発期間：平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

## 2. 研究開発実施の要約

### 2-1. 研究開発目標

本プロジェクトは、高機能自閉症スペクトラム障害（High-Functioning Autism Spectrum Disorder：HFASD）をめぐる、多様な関与者の協働に基づき「地域自閉症共生・治療共同体」（Local Community for Coexistence with and Cure of Autism：LCCCA）モデルを提案することにより、科学技術と社会の間に生ずる問題の検討を行うプラットフォームを構築するものである。具体的には、急速に展開する脳科学の知見に基づいて自閉症を治療する方向と、自閉症の個人があるがままに尊重され、自らも貢献しうる社会をめざす自閉症との共生の方向の、2つの調和の観点から、個々の事例にとり最適かつ社会的にも妥当な解を導く LCCCA モデルを、社会実験を通じて提案することにある。

平均またはそれ以上の知能を持つ HFASD は、社会への不適合が個人の困難の源泉となるという、現代社会のあり方を象徴する障害の一つとして、その成員に均しく安心を提供するためにいかに社会を構成するべきかを問うている。自閉症は、人とのかかわりの困難、言語・コミュニケーションの障害、興味の限局や行動の常同性が三大特徴である。だが、自閉症の特徴をもっている知能や言語レベル、自閉性の程度や特徴は多様であり、明確な区別ができないことから、これらの障害を「連続体（スペクトラム）」という広い概念によって捉え、自閉症スペクトラム障害と呼ぶことが専門家の間では一般的になってきた。かつて自閉症は、主に知的障害を伴う重い発達障害と見られていた。まれにギフテッドと呼ばれる優れた才能を示す者もいるが、HFASD の大多数は、知的障害を伴わないため発達初期の診断からとりこぼされ、就学前後から中高年期に至るまでのライフコースのどこかで、周囲とのかかわりやコミュニケーションの失敗を契機に不適応を起こしたのちに診断される場合が多い。通常の数倍の割合でうつ病などの精神疾患を併発し、診断が遅いと転帰が不良で、早期発見が不適応や二次的な精神疾患の予防のために重要であると報告されている。

この早期発見の議論を複雑にしているのが、顕著な不適応がないが基本的な自閉徴候をもつアトリスク（at risk、潜在的に危険にさらされている状態）のグループの存在である。彼ら／彼女らは社会との葛藤を抱えながらも、自らの行動を修正して社会に紛れて生きているが、他方で、反社会的な行動として爆発するリスクも抱えている。HFASD やそのアトリスクを積極的に早期発見し治療することは、優れた才能の芽を摘み取り、社会になんとか適応しているアトリスクの人を強制的に治療することにもなりかねない。しかし、早期発見や早期治療の道が閉ざされてしまうと、さまざまな苦悩のもとにある自閉症の人たちを放置することになってしまう。また、昨今の脳科学や分子遺伝学の進展により、自閉症の早期発見に資する診断機器や自閉症の症状を緩和する薬物などの開発が現実味を帯びてきている。このような状況において、自閉症を早期に発

見すべきか、あるいは治療すべきか否か、という争点がより先鋭化すると予想される。

以上の問題に取り組むことを目指した LCCCA モデルは、研究機関や治療・相談機関など自閉症関連の基本的社会基盤が確保可能な中規模都市圏域で活動する、HFASD 問題の各関係者カテゴリの代表から構成される共同体である。また、自閉症関連脳科学技術の進展と社会のあり方の変動との絶えざる力動的な相互作用の結節点の機能を長期継続的に果たし、地域の経済産業・社会文化的独自性に根差した自閉症の「共生・治療調和問題」の独自の解を導くことを目指すものである。LCCCA モデルの提案により、HFASD 問題に対して、関係者が協働して評価・意志決定する方が拓かれる。

## 2-2. 実施項目・内容

上記目標を達成する為に、以下の項目を実施した。

### (1) 対話の場の構築

- ◆ 市民対象各種（定点、出前、企画型）サイエンスカフェの開催
- ◆ 大型会議・シンポジウムの開催
- ◆ 「自閉症の未来を考える会」によるLCCCAのあり方の検討
- ◆ 「自閉症の未来協議会」の設立と、金沢市への政策提言の提出

### (2) 自閉症に対する社会のまなざしの解明

- ◆ 県内大学生、金沢市民を対象とした自閉症についての意識調査
- ◆ 人文社会系研究者と医学系研究者による、共生治療調和原理の探求のための会議開催
- ◆ 「自閉症に優しい学校社会」づくりのための実験候補校の選定
- ◆ 「自閉症に優しい社会」研究会
- ◆ 実験候補校への教育補助のための学生派遣
- ◆ 教師へのインタビュー

### (3) 自閉症ELSIの検討

- ◆ 『金沢会議2010』における「発達障害支援特区構想」
- ◆ 『金沢会議2011』における諸科学の研究者による自閉症共生・治療を巡る倫理的・社会的課題の検討
- ◆ 『市民熟議2012金沢』において、「小児用Magnetoencephalography Near-Infrared Spectroscopy: MEG/NIRS脳計測統合機を自閉症の早期発見に用いることの是非」を論点に設定
- ◆ 『小松会議』における自閉症治療研究の進展と社会の受け入れ体制の検討
- ◆ 「自閉症に優しい社会」研究会によるELSI考究のための新たな知見の獲得

### (4) その他の取り組み

- ◆ 自閉症スペクトラム指数 (Autism-Spectrum Quotient:AQ) の実施についての高知大学での実態調査
- ◆ HFASD診断済み及びアトリスクの学生の支援体制の検討、試行的な実施
- ◆ 金沢大学障害学生支援委員会との連携
- ◆ 共通教育科目に「学生精神と健康」を開講

## 2-3. 主な結果・成果

本プロジェクトの主要成果は、研究開発目標である、急速に展開する脳科学の知見に基づいて自閉症を治療する方向と、自閉症の個人があるがままに尊重され、自らも貢献しうる社会をめざす自閉症との共生の方向の、2つの調和の観点から、個々の事例にとり最適かつ社会的にも妥当な解を導く LCCCA モデルの社会実験を通じての提案である。

LCCCA を形成する上で特に重視した点は、1) 自らを自閉症と関わりのない存在であると考えている市民を関与者して取り込むこと、2) 金沢市の地域的特徴を考慮すること、の 2 点である。前者については、「自閉症の社会問題化」という点から、後者については、自閉症は、家庭・学校・職場などのコミュニティにおいて問題となることから、モデル形成の舞台である金沢市の家庭・学校・職場などの地域的特徴を存分に活用することにより、自閉症への実効性のある包括的支援策を遂行しやすい中規模地方都市への移転可能性を視野に入れるという点から重視した。

LCCCA モデル形成に向けての主な取り組みは、1) 対話の場の構築、2) 社会の自閉症へのまなざしの解明、3) 自閉症 ELSI (Ethics, Legal, Social Issues, 倫理・法・社会的課題) の検討、の 3 つであり、それらの取り組みの中での成果が相互に関わりながら主要成果である LCCCA モデル成果創出へとつながった。

まず、「対話の場の構築」においては、市民対象の各種サイエンスカフェを開催し、それらの参加者の中から LCCCA への関与者を得ることができた。そのなかでも、LCCCA の形成に直接つながることとなる取り組みとしては、公募市民の参加による自閉症の論点抽出会議 (『金沢会議 2010』、『市民熟議 2012』)、研究者・市民・専門家による自閉症にやさしい社会の条件を検討する会合 (「自閉症の未来を考える会」)、諸科学の研究者による自閉症問題への協働の模索を目的とした会議 (『金沢会議 2011』) の実施を挙げることができる。

次に、「社会の自閉症へのまなざしの解明」については、金沢市民を対象にした自閉症認識についての意識調査を中心として、科学者や小学校教員、当事者家族へのインタビュー調査などを実施した。これらの調査は、LCCCA 形成を具体化する上でのさまざまなデータを提供することとなった。調査で得られた知見は学会にとどまらず市民や行政に向けて広く発信し、その結果隣接他地域からは同様の調査の実施要望もあり、新たな調査も企画、実施した。

「自閉症 ELSI の検討」については、諸科学の研究者による合宿形式の会議 (小松会議) を開催するとともに、「対話の場の構築」の中で実施された上記各種会議、会合においても検討され、市民の科学リテラシーや研究者の社会リテラシーの向上に資することとなった。例えば、金沢会議 2010 においては、市民からは、「自閉症のことについてはよく分かっていないが、しかし何かの役には立ちたい」という意見、あるいは「自閉症特区」構想を期待する意見が出され、それらの意見はその後のプロジェクト推進に大いに役立てられた。また、市民熟議 2012 は LCCCA モデルのハブである「自閉症の未来協議会」との共催で、自閉症の早期発見に関する集中的な討議＝熟議が行われた。また、「自閉症に優しい社会」研究会の継続的な開催も、自閉症 ELSI の重要な検討の場の 1 つとして機能した。

以上の 3 つの取り組みと、それらの成果を相互に関連させることにより、平成 24 年 4 月には、「自閉症の未来を考える会」を発展させ、市民有志による LCCCA モデルのハブとなる「自閉症の未来協議会」の発足を促すこととなった。研究実施期間中に、本プロジェクト研究実施者の一部が開発に携わる小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機の開発進捗状況が、自閉症の早期診断機器となりうる可能性を議論する段階に来たことに鑑み、同 7 月には本プロジェクトと協議会の共催により、小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機を自閉症の早期発見に用いることの是非を論点とした『市民熟議 2012 金沢』を開催した。そして、熟議で抽出された論点をもとに協議会で金沢市における自閉症者のシームレスな支援のあり方を検討し、同 9 月には金沢市長宛てに自閉症支援に関する政策提言書を提出するに至り、LCCCA モデルの社会実験を通しての提案という目標を達成した。

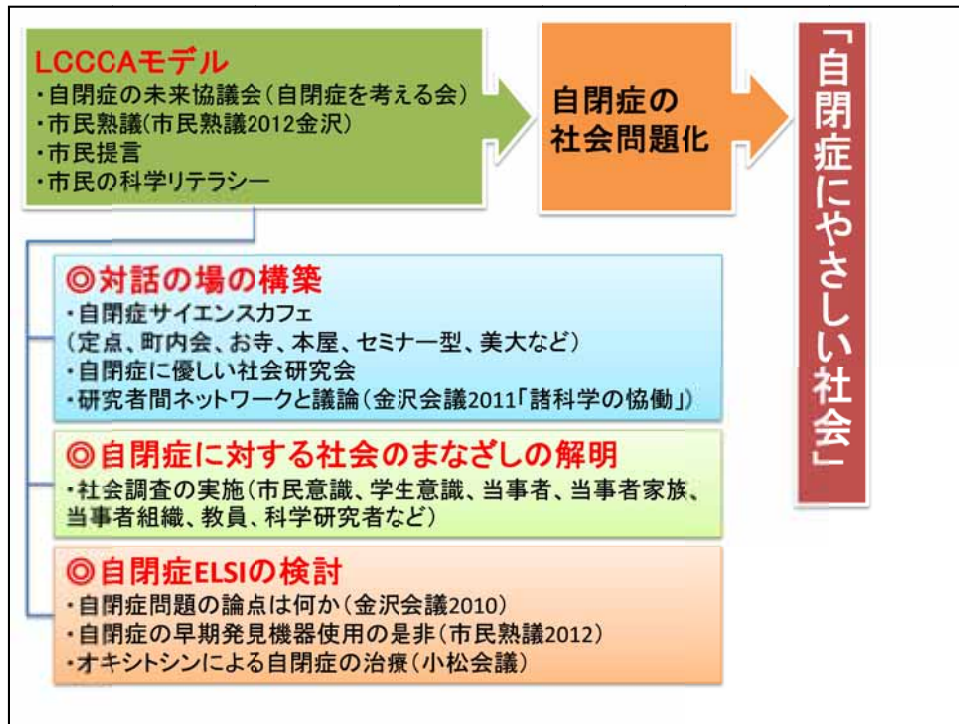


図 1. 自閉症にやさしい社会 PJ での取り組み

## 2-4. 研究開発実施体制

### 治療・共生調和実現のための地域共同体的あり方研究グループ

リーダー：大井 学（金沢大学人間社会学域・学校教育系 教授）

地域自閉症共生・治療共同体 LCCCA の構成方法検討、LCCCA モデルの提案

### 倫理・法・社会問題及び学校社会研究グループ

リーダー：青野 透（金沢大学・大学教育開発支援センター 教授）

社会の自閉症認識調査、共生治療調和原理の探索、「自閉症に優しい学校社会」づくりの模索

### 3 歳児早期発見・治療・支援研究グループ

リーダー：新井田 要（金沢大学子どものこころの発達研究センター 准教授）

3 歳児 HFASD 発見脳機能計測研究に基づく HFASD アトリスクの幼児の現状調査

### 大学生早期発見・治療・支援研究グループ

リーダー：棟居 俊夫（金沢大学子どものこころの発達研究センター 特任教授）

AQ による大学生早期発見・治療・支援と社会実装の可否及び妥当性

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### 3-1. 研究開発目標

本プロジェクトが注目する、平均またはそれ以上の知能を持つ高機能自閉症スペクトラム障害（High-Functioning Autism Spectrum Disorder : HFASD）の大多数は、就学前後から中高年期に至るまでのライフコースのどこかで、周囲とのかかわりやコミュニケーションの失敗を契機に不適応を起こしたのちに診断される場合が多い。この早期発見の議論を複雑にしているのが、顕著な不適応はないが基本的な自閉徴候をもつアトリスク（at risk、潜在的に危険にさらされている状態）のグループである。彼ら／彼女らは社会との葛藤を抱えながらも、自らの行動を修正して社会に紛れて生きているが、他方で、反社会的な行動として爆発するリスクも抱えている。

このように、社会が十分に HFASD の存在を認識できずにいる一方で、昨今の脳科学や分子遺伝学の進展により、自閉症の早期発見に資する診断機器や自閉症の症状を緩和する薬物などの開発が現実味を帯びてきている。HFASD やそのアトリスクを積極的に早期発見し治療することは、ギフテッドなどの優れた才能の芽を摘み取り、社会になんとか適応しているアトリスクの人を強制的に治療することにもなりかねない。しかし、早期発見や早期治療の道が閉ざされてしまうと、さまざまな苦悩のもとにある自閉症の人たちを放置することになってしまう。本プロジェクトが目指したものは、急速に展開する脳科学や分子遺伝学の知見に基づいて自閉症を治療する方向と、自閉症の個人があるがままに尊重され、自らも貢献しうる社会を目指して自閉症と共生する方向が調和した「自閉症にやさしい社会」の実現への道筋を提示することである。

以上のような、自閉症にやさしい社会を実現する条件として、自閉症が社会問題として認識される土壌づくりが不可欠である。医工学の領域では昨今の自閉症の早期発見治療技術の進展が目覚ましい一方、社会性認識の障害である HFASD 問題と認識されるのは、家庭、学校、職場などのコミュニティにおいてである。そのため、これらのコミュニティを包摂する地域社会が、自閉症を巡る共生と治療の関係について正しい認識を共有することが（換言すれば、自閉症を社会問題化することが）、自閉症にやさしい社会の実現に不可欠な条件であることが導かれる。

本プロジェクトは、以上の問題意識に基づき、HFASD を巡る科学技術と社会の間に生ずる問題の検討を行うプラットフォームを構築するために、多様な関与者の協働に基づき「地域自閉症共生・治療共同体」（Local Community for Coexistence with and Cure of Autism : LCCCA）モデルを提案することを研究開発上の目標に設定した。

#### 3-2. 実施項目

LCCCA モデル形成に向けての主な取り組みは、「対話の場の構築」、「社会の自閉症へのまなざしの解明であり」、両者に通底するものとしての、「自閉症 ELSI（Ethics, Legal, Social Issues, 倫理・法・社会的課題）の検討」の3つであった。「対話の場の構築」のための主な実施内容は、市民対象の各種サイエンスカフェ、公募市民による論点抽出会議及び研究者・専門家・市民有志・メディア関係者による自閉症にやさしい社会実現に向けての検討会の継続的開催である。「社会の自閉症へのまなざしの解明」のための主な実施内容は、市民対象の大規模な自閉症に関する意識調査や、科学者、教師、専門家などへのインタビューの実施である。「自閉症 ELSI の検討」については、「対話の場の構築」や「社会の自閉症へのまなざしの解明」の中で実施された大型会議、市民有志の検討会、専門家を招いての研究会を始め、ELSI 課題を集中的に議論をする研究者会議で取り組んだ。図 2 で示した通り、これら一連の取り組みは、社会実験を通じた LCCCA モデルの提案という本研究プロジェクトの研究開発目標に向けて、相互に関連を持ちつつ実施された。

具体的には、以下の項目を実施した。

1. 対話の場の構築
  - ◆ 市民対象各種（定点、出前、企画型）サイエンスカフェの開催
  - ◆ 大型会議・シンポジウムの開催
  - ◆ 「自閉症の未来を考える会」によるLCCCAのあり方の検討
  - ◆ 「自閉症の未来協議会」の設立と、金沢市への政策提言の提出
2. 自閉症に対する社会のまなざしの解明
  - ◆ 県内大学生、金沢市民を対象とした自閉症についての意識調査
  - ◆ 人文社会系研究者と医学系研究者による、共生治療調和原理の探求のための会議開催
  - ◆ 「自閉症に優しい学校社会」づくりのための実験候補校の選定
  - ◆ 「自閉症に優しい社会」研究会
  - ◆ 実験候補校への教育補助のための学生派遣
  - ◆ 教師へのインタビュー
3. 自閉症ELSIの検討
  - ◆ 『金沢会議2010』における「発達障害支援特区構想」
  - ◆ 『金沢会議2011』における諸科学の研究者による自閉症共生・治療を巡る倫理的・社会的課題の検討
  - ◆ 『市民熟議2012金沢』において、「小児用Magnetoencephalography Near-Infrared Spectroscopy: MEG/NIRS脳計測統合機を自閉症の早期発見に用いることの是非」を論点に設定
  - ◆ 『小松会議』における自閉症治療研究の進展と社会の受け入れ体制の検討
  - ◆ 「自閉症に優しい社会」研究会によるELSI考究のための新たな知見の獲得
4. その他の取り組み
  - ◆ 自閉症スペクトラム指数（Autism-Spectrum Quoutient:AQ）の実施についての高知大学での実態調査
  - ◆ HFASD診断済み及びアトリスクの学生の支援体制の検討、試行的な実施
  - ◆ 金沢大学障害学生支援委員会との連携
  - ◆ 共通教育科目に「学生の子供と健康」を開講



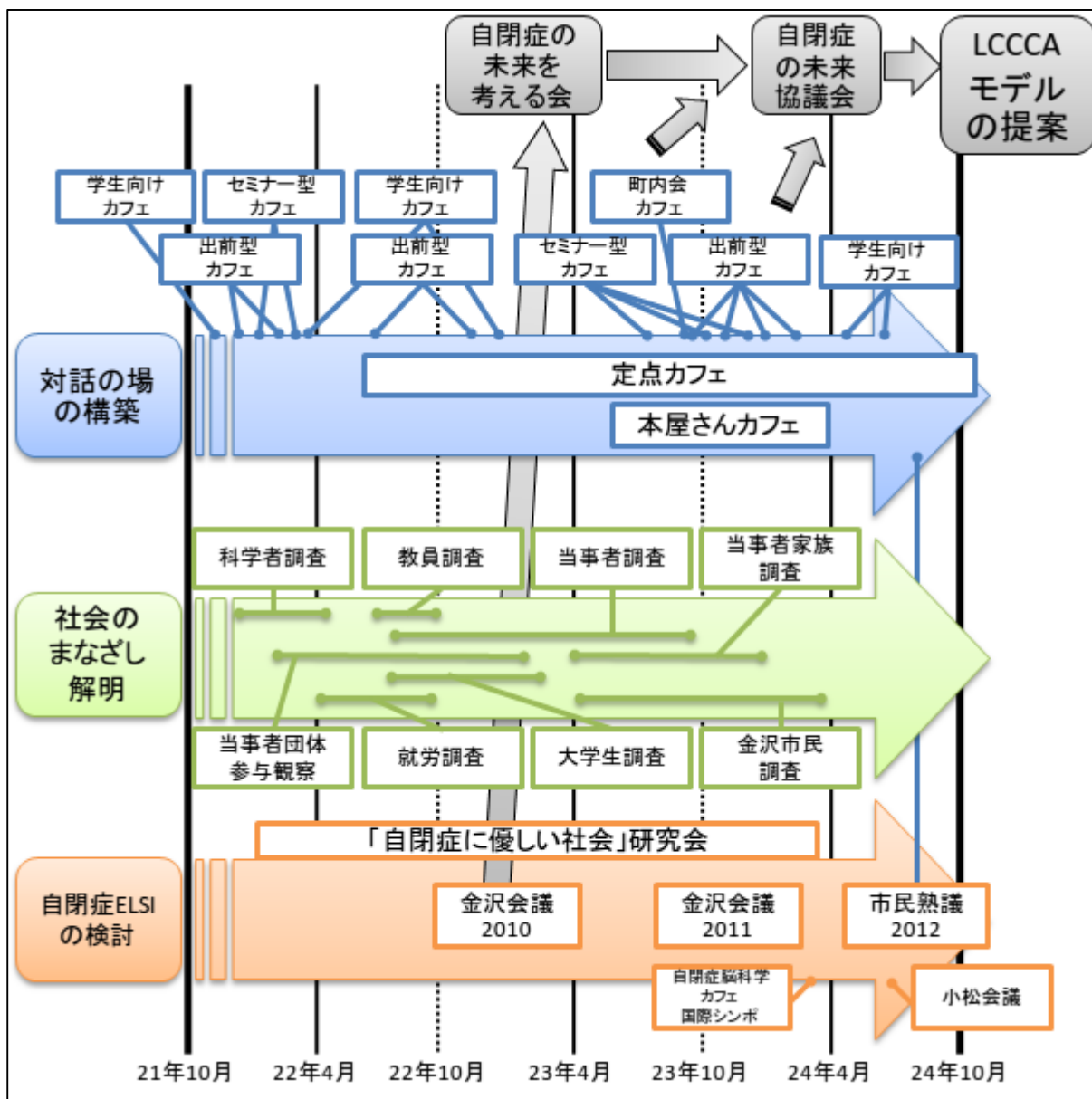


図 2. プロジェクト工程表

### 3-3. 研究開発結果・成果

#### 3-3-1. LCCCA モデルの社会実験を通じての提案

本プロジェクトの主要成果は、研究開発目標である、急速に展開する脳科学の知見に基づいて自閉症を治療する方向と、自閉症の個人があるがままに尊重され、自らも貢献しうる社会をめざす自閉症との共生の方向の、2つの調和の観点から、個々の事例にとり最適かつ社会的にも妥当な解を導く LCCCA モデルの社会実験を通じての提案であった。

LCCCA モデルを形成する上で特に重視した点は、1) 自らを自閉症と関わりのない存在であると考えている市民を関与者して取り込むこと、2) 金沢市の地域的特徴を考慮すること、の2点である。前者については、「自閉症の社会問題化」という点から重視され、後者については、自閉症は、家庭・学校・職場などのコミュニティにおいて問題となることから、モデル形成の舞台である金沢市の家庭・学校・職場などの地域的特徴を存分に活用することにより、自閉症への実効性

のある包括的支援策を遂行しやすい中規模地方都市への移転可能性を視野に入れるという点から重視された。

LCCCA モデル形成に向けての主な取り組みは、対話の場の構築、社会の自閉症へのまなざしの解明、及び両者に通底するものとしての、自閉症 ELSI (Ethics, Legal, Social Issues, 倫理・法・社会的課題) の検討であり、それらの取り組みの中での成果が相互に関わりながら主要成果である LCCCA モデル提案という成果創出へとつながった。

「対話の場の構築」においては、市民対象の各種サイエンスカフェを開催し、それらの参加者の中から何人かの LCCCA モデルへの関与者を得ることができた。また、LCCCA モデルの提案に直接つながることとなる、公募市民の参加による自閉症の論点抽出会議(『自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010』『市民熟議 2012 金沢』)、研究者・市民・専門家による自閉症にやさしい社会の条件を検討する会合(「自閉症の未来を考える会」、諸科学の研究者による自閉症問題への協働の模索を目的とした会議(『「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」金沢会議 2011』)を実施した。そして、このような場では、自閉症を巡る ELSI の検討も同時に行われるなど、LCCCA 形成に向けての取り組みは、市民の科学リテラシーや研究者の社会リテラシーの向上に資することとなった。また、関連分野の研究者を講師として招へいし、本グループ研究実施者との間で意見交換を行った(「自閉症に優しい社会」研究会)。

「社会の自閉症へのまなざしの解明」については、金沢市民を対象にした自閉症認識についての意識調査を中心として、科学者や小学校教員、当事者家族へのインタビュー調査などを実施した。これらの調査は、LCCCA 形成を具体化する上でのさまざまなデータを提供することとなった。調査で得られた知見は学会にとどまらず市民や行政に向けて広く発信し、その結果隣接地域からは同様の調査の実施要望もあり、新たな調査も企画、実施した。

以上の3つの取り組みと、それらの成果を相互に関連させることにより、平成24年4月には、「自閉症の未来を考える会」を発展させ、自閉症と接点のない市民も発起人となり LCCCA モデルのハブ的機能をもつ「自閉症の未来協議会」が結成された。研究実施期間中に、本プロジェクト研究実施者の一部が開発に携わる小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機の開発進捗状況が、自閉症の早期診断機器となりうる可能性を議論する段階にきたことに鑑み、同7月には本プロジェクトと協議会の共催により、小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機を自閉症の早期発見に用いることの是非を論点とした『市民熟議 2012 金沢「自閉症 聞いて話して考える」』を開催した。熟議で抽出された論点をもとに協議会で金沢市における自閉症者のシームレスな支援のあり方を検討し、同9月には金沢市長宛てに自閉症支援に関する政策提言書を提出するに至った。

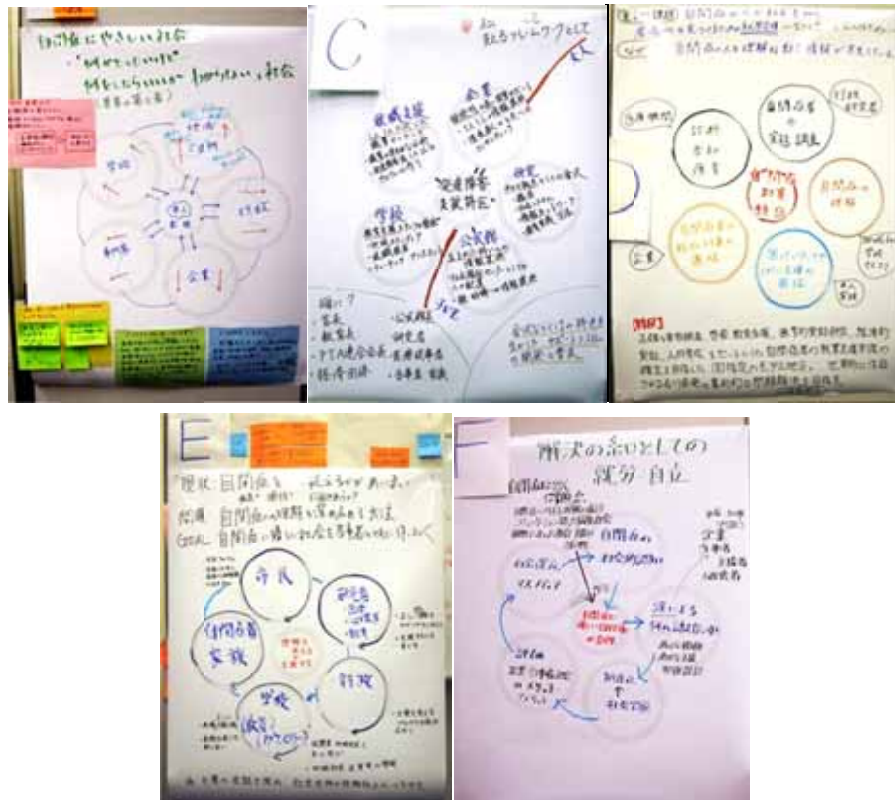
上記のような相互に密接な関連性をもつ取り組みを通じて、LCCCA モデルの提案という目標を達成した。

### 3-3-2. LCCCA モデル形成に至る各取り組みとその成果

#### (1) 対話の場の構築

##### ①市民参加の会議

本取り組みにおける最初の重要な成果は、平成 22 年 9 月から 11 月にかけて 3 回にわたり開催された『自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」』であった。市民らが 6 グループに分かれ議論し、「自閉症にやさしい社会」に向けた市民提言<sup>1</sup>が発信された。各グループとも、金沢という地域の独自性を反映した自閉症支援のあり方を構築すべきとの考え方で一致し、実現に向けた方策としての「発達障害支援特区」の構想は新聞報道でも大きく取り上げられた(北陸中日新聞, 平成 23 年 1 月 1 日)。金沢会議 2010 の成果を受けて、市民有志が「自閉症にやさしい社会」の実現に向けた話し合いの場である「自閉症の未来を考える会」を組織した。この会には、研究者のほか、企業経営者、教育、医療、福祉、行政に関わるさまざまな市民が参加しており、特区構想の実現のため、どのようなことを行うべきか、対応策を打ち出すことができるかが議論された。



『自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」』  
市民によりポスターにまとめられた提言

<sup>1</sup> 各グループの具体的な提言内容は本プロジェクトの以下のサイトを参照。  
『自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」』  
(<http://ristex-kanazawa.w3.kanazawa-u.ac.jp/syoppu/Consensus.htm>)

結果的には特区申請には至らなかったが、特区申請で目指された取り組みの一部は金沢市の平成 24 年度予算で措置された。

平成 23 年度中には、「自閉症の未来を考える会」を政策への接続や社会的アピールという点でも確固たるものにするため、その凝集性を高め、組織化を図ることによって LCCCA モデルのハブ機能を備えた組織である「自閉症の未来協議会（以下、協議会）」の形成を促し、平成 24 年 4 月 1 日に協議会の発足に至った。協議会の中心的なメンバーは「自閉症の未来を考える会」への継続的な参加者のみならず、これまで各種サイエンスカフェに参加した一般市民、自閉症当事者団体や医療、福祉関係者等の各種ステークホルダーなど広範囲にわたり、メンバーシップはオープンなものとなった（大学・メディア関係者はオブザーバーとして参加。ただし、当面は大学関係者が事務局機能を担当している）。平成 24 年 7 月には、金沢市に自閉症共生・治療に関する政策提言を行う準備作業として、本プロジェクトと協議会の共催の形で、『市民熟議 2012 金沢「自閉症 聞いて話して考える」』を 2 日間にわたり開催した。マスメディアやインターネット、さらにはこれまでに取り込んだ関与者のネットワークなどを通し、市民に参加を呼びかけた。集まった多数の応募者から、性別・年齢・自閉症との関係性等を考慮し、熟議の参加者に偏りができないように 30 名を選考した。小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機が自閉症の早期発見機器としての可能性を議論できる段階に到達したことに鑑み、熟議では、参加者を 5 グループに分け、MEG/NIRS を自閉症の早期発見に用いることの是非を論点に、科学技術の進歩が子育てに与える影響や社会のあり方を巡る議論を行った。熟議後には、協議会が中心となり、熟議で抽出された意見や論点を叩き台に、金沢市に対する政策提言が作成され、同 9 月 27 日には、金沢市長に支援体制の整備に関する提言『自閉症と早期発見と支援体制の充実のために』が提出された（別添参考資料参照）。

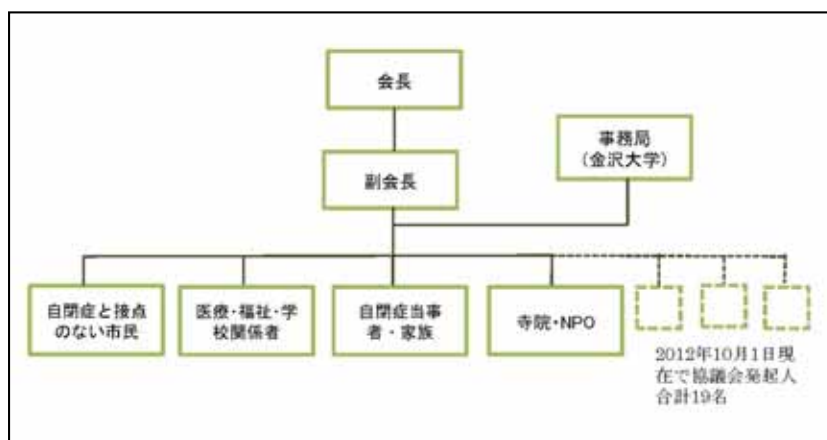


図 3. 自閉症の未来協議会組織図



『市民熟議 2012 金沢』の様子

金沢市長への提言提出の様子

## ②市民向け定点型サイエンスカフェ

毎月 22 日に開催した。平成 22 年度は計 10 回 (6～3 月)、平成 23 年度は計 12 回 (4 月～3 月)、平成 24 年度は 5 回 (4 月～9 月、7 月は開催せず) の、合計 27 回にわたり開催した。毎回 2～6 名の研究者が市民の輪に加わり、お茶を飲みながら自閉症について自由に語り合う場を提供している。これまで、自閉症について語る場が少なく、さまざまな悩みを抱えていた当事者や当事者家族の意見交換の場としても定着している。本研究開発プロジェクト終了後も、『カフェで語ろう!!! 自閉症』は、金沢大学子どもこころの発達研究センターの取り組みとして継続される予定である。



市民向け定点カフェの様子

### ③出前・企画型サイエンスカフェ

出前・企画型サイエンスカフェは、幼稚園児の保護者（母親、父親）、保育所の保育士や保護者、町内会組織のメンバー、寺院、近隣大学学生などを対象に、本プロジェクトの主体的な企画やカフェの開催希望者からの提案で実施された。これらのカフェでは、各集団の知識や背景に応じて、「自閉症とは何か」という基本的なことから、家庭や保育現場などにおける具体的な自閉症問題にわたる幅広い話題提供や議論がなされた。これら各種のサイエンスカフェの参加者から、今後の「自閉症にやさしい社会」づくりの重要な担い手となる「自閉症の未来協議会」への主体的な参加者も現れ、本プロジェクト開始時よりの課題であった「自閉症にやさしい社会づくりに向けての人材育成」の成果に結びついた。

また、平成 23 年度までの、対話の場づくりのための取り組みの成果を分析すると、若年層の参加者が少ないことが判明した。長期的な「自閉症にやさしい社会」を実現するためには、若年層の取り込みが必須である。若年層を取り込むために、平成 24 年度は、金沢の次世代リーダーとなる金沢大学学生を対象として、大学教育開発・支援センターが昼休みに開催している「ランチョンセミナー」を活用したサイエンスカフェである、『ランチョンカフェ「人間関係について考えよう」』を 4 日間にわたり実施し、延べ 187 人の参加者を得た。また、発達障害を扱う共通教育の授業ともタイアップしたサイエンスカフェを開催し、HFASD 問題や自閉症の診断テストを新入生向けの健康診断で実施することの是非などを話し合った。このような取り組みを通じて、HFASD 問題に興味を持ち、市民熟議 2012 金沢に参加した学生も現れた。



幼稚園保護者対象サイエンスカフェの様子

#### ④本屋さんカフェ

平成 23 年度より試みた『本屋さんカフェ』は、HFASD 等に関する一般書を媒介とすることにより、自閉症についての背景知識や、自閉症について話す上での「用いる言葉」が違う市民、研究者、当事者などの間に共通のプラットフォームを作るべく企画したサイエンスカフェであり、平成 23 年度中に計 5 回、平成 24 年度中に計 1 回の合計 6 回にわたり実施した。「本」という媒介が存在することから、出前型サイエンスカフェと比べ、研究者や当事者をはじめとする話題提供者の間の議論のみならず、話題提供者とカフェに参加した市民の間にも、より双方向的で活発な意見交換が実現した。



本屋さんカフェの様子

種類 (回数)	平均参加者数 (のべ参加者数)	平均年齢	男女比 (男：女)	主な参加者	内容・特記事項
定点型 (27回)	15.5人 (416人)	46.5歳	1:4	当事者、当事者家族	・新規参加者の割合の平均値は、31.3% (0% ~ 66.7%)
町内会 (1回)	25人	59.4歳	1:1	地域住民(高齢者)	・自閉症を知っている人はいない
本屋さん (6回)	23.0人 (138人)	42.8歳	1:2	当事者、一般市民	・41.1%が自閉症と接点のない参加者
出前型 (15回)	17.9人 (250人)			保育所・幼稚園の保護者、保育士、大学教員、地域住民	・寺院の住職、子育て支援 NPO、当事者支援 NPO などの協力
セミナー型 (5回)				企業経営者、教員、保育士など、	・HFASD 問題の啓発を目的に、オーディエンスに応じた内容
学生向け (8回)	36.4人 (291人)			大学生(1年生、2年生)	・啓発的なセミナー型から、学生が主体的に話し合う形式に変化

カフェの回数：62回

カフェを含むイベント：108回

表 1. 各種サイエンスカフェの内訳

### ⑤研究者による大型会議、国際シンポジウム等

平成 23 年度に実施した重要なイベントの一つが、脳科学、精神医学、心理学、教育学、経済学、社会学、哲学など諸科学の専門家による、多面的に自閉症問題を検討する場としての『「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」金沢会議 2011』(10 月)である。諸科学の専門家が一同に会し多面的に自閉症問題を検討することは全国初の試みであり、諸科学間の自閉症に対する認識の違いを改めて浮き彫りにするものであった。たとえば、自閉症に対する薬物治療に対して、人格変容などの副作用をもたらす可能性が低いとする医学研究者と、逆にそのような可能性を懸念する哲学研究者との間で明確な意見の相違がみられた。また、現在は学齢期にある自閉症や発達障害のある子どもたちが、成人後に就労シタックス・ペイヤーとなるような体制を作るべきなのか、それとも、無理に就労しなくても生活できるシステムが望ましいのかなど、当事者たちが、社会でどのような役割を担っていくのかについても、哲学・倫理的側面に加え、社会経済的側面からも議論が交わされた。

この金沢会議 2011 によって、自閉症を巡る学際的研究の困難と可能性を示唆し、今後の「地域自閉症共生・治療共同体」の社会実装に向けての哲学的、倫理的、社会的課題が抽出されることとなった<sup>2</sup>。



『「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」金沢会議 2011』の様子

<sup>2</sup> 各話題提供者の講演内容(動画)は金沢大学子どものこころの発達研究センターHPで公開(<http://kodomo-no-kokoro.net/>)



次に実施した重要な企画が、『自閉症脳科学カフェ』および国際シンポジウム『自閉症と社会』である（第2回「金沢大学子どものこころのサミット」最終日に開催）。前者は、自閉症の診療・治療技術の劇的な進展（の可能性）を踏まえての研究者と市民（自閉症に接点のない市民、自閉症児の保護者等）による対話であり、市民からは、子どもの成長に与える影響が未知数であることから、研究の進捗状況や自閉症の早期発見が持つかもしれない否定的側面について、忌憚のない意見が提示された。後者は、日米の研究者が自閉症を倫理的視点から検討する第一部「自閉症の倫理学」と、自閉症者のための企業を運営する社会企業家による「自閉症のための企業」の2部構成であり、自閉症者を社会のメンバーとして「共生」することの倫理的立場からの検討や、自閉症者のための職場づくり企業経営の成功例と失敗例、さらには、今後の取り組みなどの話題提供がなされた。



『自閉症脳科学カフェ』



国際シンポジウム『自閉症と社会』



自閉症者のための職場づくり（農業経営）<sup>3</sup>

<sup>3</sup> 平成24年4月には、「自閉症の未来協議会」のメンバーであり本プロジェクト推進にとって重要な役割を果たした、企業経営者でもある当事者家族が、全国的にも珍しいHFASDの人の就労を目指した農業法人を立ち上げた。障害のある人の持ち味を生かせる環境をどうつくるのか、彼ら／彼女らに合った方法で生産性を上げることができれば、非常に画期的な試みとなる。

## (2) 社会の自閉症へのまなざしの解明

### ①社会の自閉症へのまなざしの生成過程

本プロジェクトの研究開発のためには、社会の自閉症へのまなざしの生成過程の解明と具体的な論点に基づく早期発見治療研究における調和問題の包括的な議論が必須である。当グループの研究開発目標を実現するために、大学生を対象とした意識調査と金沢市民を対象として実施した意識調査（「発達障害と共生社会に関する意識調査の結果」）を行った。調査の概要と結果は以下の通りである。

#### a) 大学生に対する意識調査

平成 22 年度は、大学生に対する意識調査を実施した。結果は以下の通りである。障害と病いに関する大学生の意識調査を石川県内の A 大学において、平成 22 年 7 月から平成 23 年 1 月までの調査期間で実施した（比較のために別の 2 校でも実施）。調査方法は自記式で、調査票は授業時間内に配布・回収を行った。回収数は 1701 票であった（他の 2 校を含めると 1849 票）。

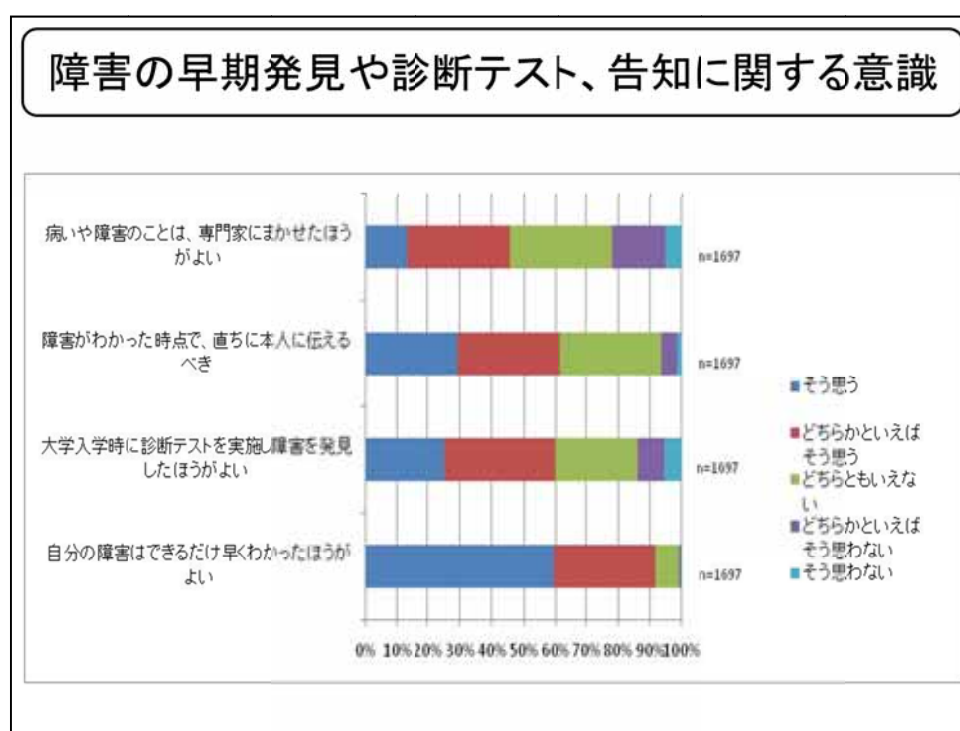


図 4. 大学生意識調査の結果（抜粋）

得られた知見の一部を列挙すると、①「自閉症」の認知度はかなり高いが、「広汎性発達障害（PDD）」や「高機能自閉症」、「アスペルガー症候群」については認知度が低い。ただし、②「名前」だけなら「高機能自閉症」、「アスペルガー症候群」については約 5 割～6 割の割合で認知されている。③自閉症の児童が普通学校や通常学級に「適応」すべきと考える割合が高い（60.2%）。④自閉症の子どもと他の子どもが学校で一緒に過ごすことは問題が多いとする回答の割合が 4 割弱（38.0%）。他方で、⑤自閉症の子どもが学校を自由に選択できるようにしたり、普通学校や通常学級の環境整備は必要とする割合も高い（約 7 割弱）。最も意外な結果だったのは、⑥自分の障害の早期発見にはきわめて肯定的（91.7%）なことと、⑦大学入学時の障害の診断テストについても肯定的な回答の割合が高かったこと（60.0%）である。つまり大学生の意識は、「共生」も必要だが、医療や療育などによる「適応」や「すみ分け」に対する強い肯定も示している。本調査を実施することにより、調査結果が示す意味と活用方法を検討することが、研究開発目標に向けての重要な課題として認識された。

## b) 市民対象の意識調査

平成 23 年度は、平成 22 年度に実施した学生意識調査の結果を踏まえて、金沢市民を対象として実施した意識調査（「発達障害と共生社会に関する意識調査の結果」）を行った。調査の概要と結果などは以下の通りである。

平成 23 年 10 月に、無作為に抽出した 1000 人の金沢市民（20 歳以上 70 歳未満）に自記式の調査票を郵送し、調査への回答と調査票の返送を依頼した。11 月 30 日まで、有効回収数は 581 票を得た。回収率は 58.5%であり、この種の調査としては比較的良好な回収率となった。

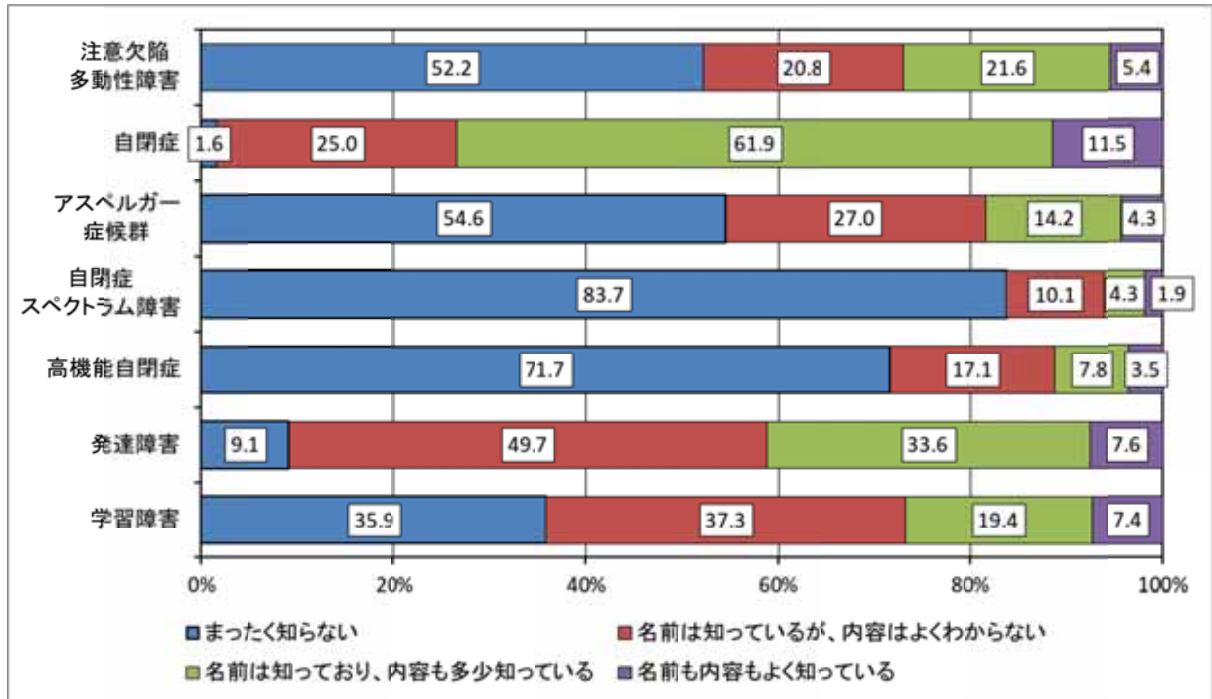


図 5. 自閉症や発達障害などに関する認識 (N=515)

これまでに得られた分析結果の一部を提示する。まず、自閉症や発達障害などの認知度を図 5 に示した。「自閉症」の認知度はかなり高くなっている。「まったく知らない」と回答した市民は、1.6%であり、ほとんどの市民が「自閉症」という名前を知っていることになる。「発達障害」も「まったく知らない」市民は 9.1%であり、「発達障害」という名前は広く知られている。しかし、「名前は知っているが、内容はよくわからない」とする回答が約 50%を占めていることから、多くの市民は発達障害の「内容」を認識していないことがわかる。「自閉症スペクトラム障害」や「高機能自閉症」は、「まったく知らない」とする回答者が約 7 割から 8 割に及んでいる。以上から、「自閉症」のみ突出して知られていることがわかる。

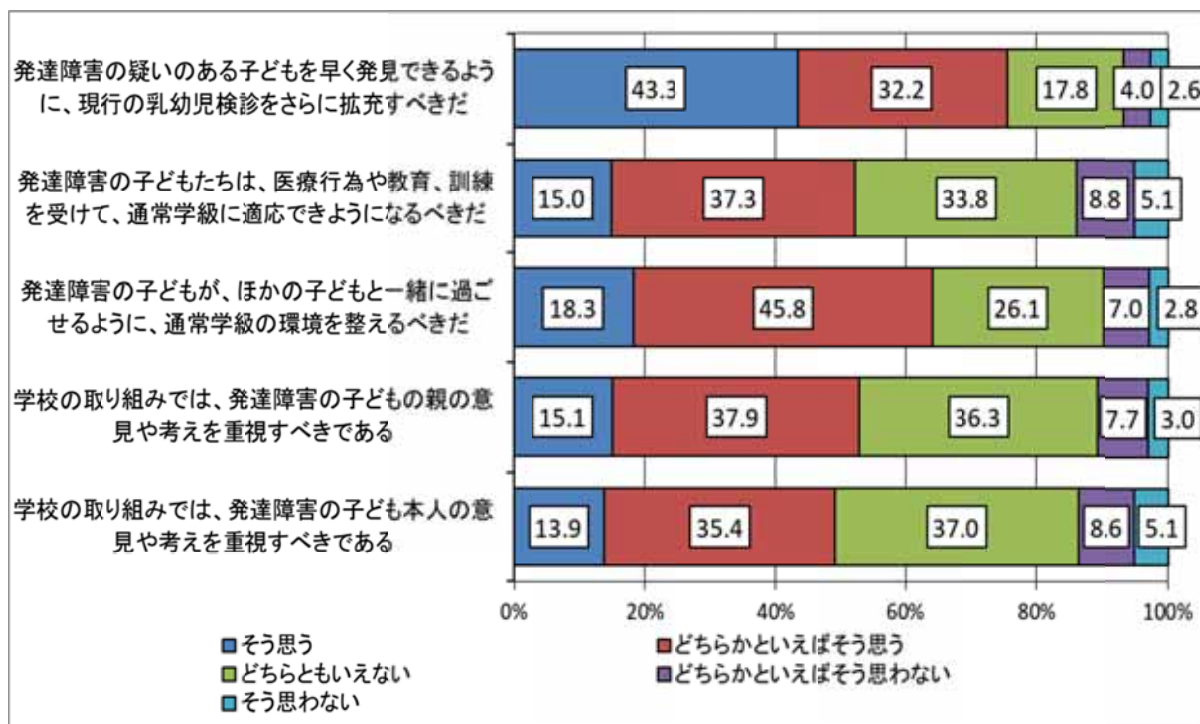


図 6. 早期発見や治療に関する意識 (N=569)

つづいて、発達障害の早期発見、教育への意識を図 6 に示した。発達障害の早期発見に対して、否定的な回答 (6.6%) よりも肯定的な回答 (75.4%) の割合が高くなっていることがわかる。さらに、52.4%の回答者が発達障害の子どもは通常学級に「適応」すべきと考えている。他方で、発達障害の子どものために通常学級の環境整備が必要とする割合は高く (64.2%)、学校での取り組みでは、発達障害の子ども親や子ども本人の意見を重視すべきとする割合も約 5 割と高くなっている。発達障害の早期発見と医療や養育などによる「適応」には肯定的な態度をとる人が多くなっているが、発達障害の子どもたちとの「共生」を望む声もまた存在している。市民は、自閉症や発達障害との「治療」と「共生」をとともに満たすような取り組みを求めており、これに答えることが、本プロジェクトの重要な課題である。

平成 24 年度は、得られたデータの詳細な分析を進め、これまでに得られた自閉症に関連する科学者、学校教員、家族に対するインタビューデータ、平成 22 年実施の学生意識調査、平成 23 年実施の白山市民意識調査などと比較検討を行うことで、社会の自閉症へのまなざしの把握に努めた。また、分析結果は、適宜「自閉症の未来協議会」での議論や、発達障害の早期発見 (3 歳児及び大学生) の体制づくりのための基礎的なデータとして活用した。

### c) サイエンスカフェにおける市民の発言分析

平成 24 年度の研究開発目標である早期発見治療研究における共生と治療の調和を具体的に議論するための前提として、本プロジェクトが主催・共催する各種のサイエンスカフェやシンポジウムでの市民の発言内容を整理し、論点の抽出を行った。自閉症問題や自閉症研究に対する市民の発言は多岐にわたっている。そのなかでも、早期発見及び治療に関しては、肯定的見解と否定的見解が混在しており、なおかつその調停が容易ではないことがわかった。意識調査の分析結果同様、本分析結果および抽出した論点は、随時「自閉症の未来協議会」での議論や、発達障害の早期発見 (3 歳児及び大学生) の体制づくりのための基礎的なデータとして活用した。

## ②「自閉症に優しい社会」研究会

毎回 1 名の演者が自閉症問題の現在についてそれぞれの視点や研究背景から語り、その後議論

をするという形式で、合計 13 回実施した。遺伝学、社会学、哲学、教育学など多岐にわたる研究者が話題提供を行っただけでなく、アトリスクあるいは高機能自閉症者など当事者による対談が行われ、実際の社会や日常の場において自閉症者がかかえる困難について、聴衆による活発な質疑が交わされた。

### ③「自閉症にやさしい学校社会作り」

平成 21 年度より、「自閉症にやさしい学校社会作り」のためのアクション・リサーチを実施した。そのための実験的試行予定校を選定し、教職員と検討を行ったが、制度上の問題もあり具体的なモデル提案にまでは至らなかった。しかし、教師へのインタビューの実施とともに、本学教育学と社会学専攻の学生を、地元小学校に発達障害児学習補助として派遣することを通し、特別支援教育のための制度が整備される一方で、担当する人材の養成が追いついていないといった、教育現場の現状を把握した。

### ④大学生向けランチョントーク

平成 22 年度は、大学生の自閉症に関する認識の質的把握を行うため、学生主催のランチョントークを行った。ランチョントーク参加者のうち、AQ テスト実施の賛成は 5 名、反対は 1 名であった。実施に積極的な理由としては、「AQ テストは心理テスト感覚でできる」、自閉症のイメージとして「閉ざされている」、「しゃべらない」、「閉じこもり」、「反応がない」、あるいは「冗談が通じないってヤバイ。普通じゃないのかもと感じる」などの意見が出た。他方で、実施の慎重な理由としては「AQ テストの義務化はまずい」、「自閉症は異常だという偏見を広める」、「コミュニケーションの過大評価につながる」という意見も出た。倫理・法・社会問題及び学校社会研究グループによる大学生意識調査の結果も踏まえ、次年度はさらに活発な議論を展開したい。また、高機能自閉症診断済みの大学生については、学科長、担当教員、カウンセラー、研究員との情報のやりとり及び連携の強化を試みた。学生生活において起こりうる問題の把握と対処方法について、過去に起きた問題の整理を通じて、当人とカウンセラーとの間で相談がなされ、必要に応じて配慮事項が担当教員に伝達された。

## (3) 共生と治療の調和原理の考究

### ①諸科学の研究者による調和原理の考究

「対話の場の構築」や「社会の自閉症へのまなざしの解明」に取り組むと同時に、それらを通底するものとしての共生の調和原理を考究することは必須の作業である。そのため、これら 2 つの取り組みの中で実施されることとなった。

自閉症が社会性の障害であり、医療面からのアプローチだけでは十分な対応が期待できない以上、人文社会科学と医学系研究者による調和原理の模索は重要な課題であった。平成 23 年 10 月に開催した『「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」金沢会議 2011』はそのような取り組みの一環であった。自閉症をテーマに諸科学の研究者がこのような形で一堂に会し議論することは全国初の試みであり、諸科学間における自閉症に対する認識の違いを浮き彫りにすることとなった。さらに最終年度の平成 24 年 6 月には、哲学、倫理学、教育学、法学、社会学、脳神経科学の研究者による合宿形式の会議（『自閉症 ELSI 会議 in 小松』）を開催し、オキシトシンを用いた自閉症治療研究を論点に議論した。また、この場では、研究成果のメディアへの発表の仕方や、メディアが誤った内容を伝えた場合の対応法も検討された。会議は非公開とし、その記録は今後の研究のための一次資料として活用される予定である。また、「社会のまなざしの解明」の中で実施された、「自閉症に優しい社会」研究会も調和原理の考究の目的を有していた。

## ②市民による調和原理の考究

LCCCA の形成に直接つながった『自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010』やそれを契機に始まった「自閉症の未来を考える会」、そして後述の『市民熟議 2012 金沢』も、市民による調和原理の考究の場として重要な役割を果たした。

## ③小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機の自閉症早期診断機器としての可能性の検討

研究開発期間中に、本プロジェクト「3歳児早期発見・治療・支援研究」グループの研究実施者が開発に携わっている小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機が、自閉症の早期発見機器としての可能性を議論できる段階に到達した。そのため、本グループでは小児用 MEG/NIRS 脳計測統合機を自閉症の早期発見機器として用いる是非を、「科学技術と社会の間の問題」としての中心的課題とした。平成 23 年度には、MEG による機能的結合の側性化指数のみで診断した場合には、診断精度は 80% (図 7)、更に、MEG による機能的結合の側性化と、10 分間程度の「なぞなぞ」を用いて診断した場合には、88.6%の診断精度が認められる段階に達した (図 8)。

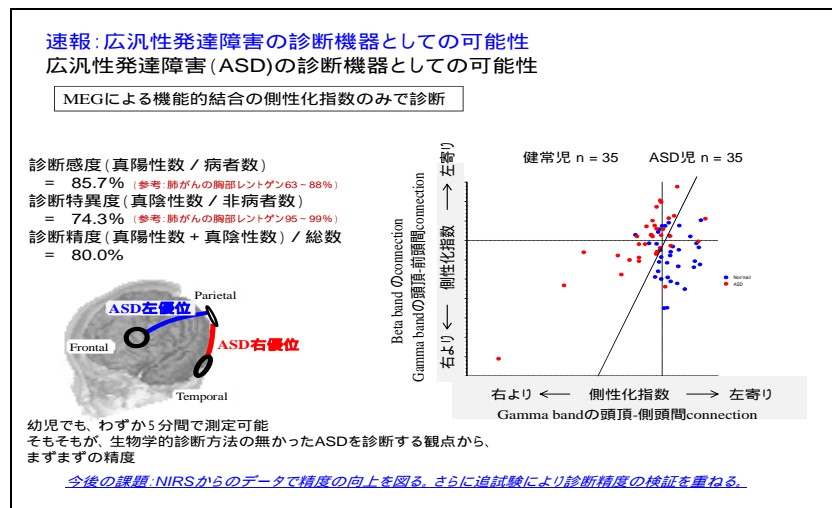


図 7. MEG による機能的結合の側性化指数のみで診断

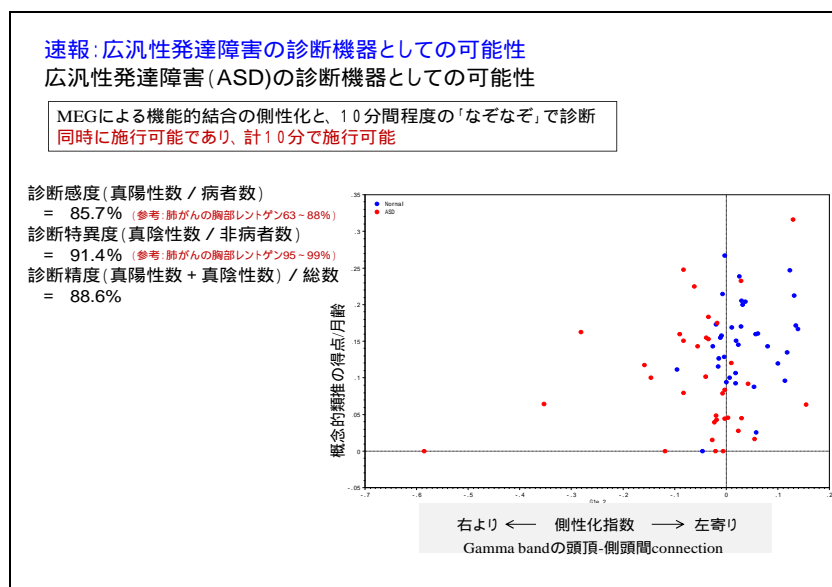


図 8. MEG による機能的結合の側性化と、10 分間程度の「なぞなぞ」で診断

平成 23 年度の MEG/NIRS の開発進展状況により、MEG/NIRS が自閉症の早期発見機器としての可能性を議論できる段階に到達したことに鑑み、本グループ研究実施者が、「自閉症の未来を考える会」、各種カフェなどで、市民に向けた説明を行い、活発な意見交換を行った。本プロジェクトの目標である LCCCA モデルの社会的実験による提案との関連では、平成 24 年度に、「自閉症の未来協議会」と本プロジェクトの共催による『市民熟議 2012 金沢』において、MEG/NIRS の早期診断機器としての可能性や問題点を主要検討課題として市民有志による議論がなされ、本グループ研究者も話題提供者として参加した。

#### (4) その他の取り組み（大学生向け取り組み）

「学生早期発見・治療・支援研究」グループは、AQ による大学生早期発見・治療・支援と社会実装の可否及び妥当性について各種調査および情報収集を行うことにより、LCCCA モデル形成につながる各種データを提供した。

##### ①高知大学への訪問調査と金沢大学へのフィードバック

平成 21 年度は、新入生に対して関連調査を試みている、高知大学を訪問調査校とした。同大学は、国立総合大学であり、偏った属性をもつ高等教育機関ではないことから、貴重な調査対象校と言える（以上の特徴は金沢大学にも当てはまる）。高知大学における調査をもとに、金沢大学障害学生支援委員会と連携し、診断済み学生が所属する部局を中心に、定型の学生によるチューターの支援チームの整備を行った。これに伴い、共通教育科目として「学生の精神の健康」を開講した。

##### ②その他

23 年度以降は、主に他大学における発達障害学生支援の取り組みに関して情報の収集を行った。これらのデータと 22 年度実施の大学生の自閉症に関する認識の質的把握（学生主催のランチョントーク）をもとに、24 年度に、金沢大学学内における学生向けサイエンスカフェを開催するための検討を行った。具体的には、(1) 大学教育開発・支援センター（本学における「ランチョンセミナー」実施主体）、保健管理センターとの連携、(2) 研究実施者担当の授業の活用、(3) 事業実施に協力可能な学生の募集と組織づくりが行われた。

#### <本プロジェクトにおける、ワークショップ等の一覧>

年月日	名称	場所	実施目的	対象者
2009 年 7 月 31 日	自閉症サイエンスカフェ @木の花幼稚園	木の花幼稚園	障害のある園児を受け入れてきた幼稚園にて、自閉症をテーマに対話。	在園児の保護者
2009 年 12 月 17 日	自閉症サイエンスカフェ @木の花幼稚園	木の花幼稚園	早期発見、治療か共生かを中心に議論。	健常児、自閉症児の保護者
2010 年 1 月 13 日	学内自閉症サイエンスカフェ	金沢大学角間 キャンパス 総合教育棟	大学生期の自閉症早期発見と支援について議論。	大学生、大学関係者

2010年 1月24日	保育関係者対象自閉症サイエンスカフェ	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂	早期発見と、その理解や支援について、また脳機能計測による自閉症兆候の早期発見の是非についての議論。	幼児教育・保育関係者
2010年 2月18日	自閉症遺伝子研究の倫理についての勉強会	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議室	ASD児の両親を対象としたインタビュー調査を行っている東島仁氏による勉強会。	研究者
2010年 3月2日	HFASD 幼児の早期発見と発達過程に関する講義	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議室	神尾プロジェクトの一員である田中優子氏による「科学技術の相互作用」についての勉強会。	3歳児早期発見支援グループ
2010年 3月11日	自閉症にやさしい学校社会づくりの模索	金沢市立中央 小学校	学齢期における自閉症児への理解と支援について議論。	校内委員会 教諭
2010年 3月14日	市民公開自閉症サイエンスカフェ	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議室	自閉症にやさしい地域社会づくりと脳科学による早期発見・治療について議論。	自閉症に直接関わりのない市民
2010年 4月6日	金沢大学図書館での自閉症カフェ	金沢大学角間 キャンパス中央図書館 カフェ	ポストイットを用い議論を整理しながら、グループごとに自閉症にやさしい社会について議論。	大学生・教員
2010年 4月19日	勉強会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	徳島大学大学院檜田美雄准教授による話題提供（演題：「発達障害のビデオエスノグラフィー」）ののち、ビデオデータセッション実施。	研究者
2010年 5月12日	第1回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	金沢大学人間社会研究域人間科学系松田洋介准教授による話題提供（演題：「教育社会学研究からみた自閉症」）ののち、議論。	研究者・学生
2010年 6月7日	ASD 研究会	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議室	精療発達障害研究所・精療クリニック小林 白瀧貞昭医師による話題提供（演題：「高機能自閉症スペクトラム障害における母子愛着確立障害と語用論の障害」）ののち、議論。	研究者



2010年 6月9日	第2回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	金沢大学人間社会研究域人間科学系田邊浩准教授による話題提供（演題：「自閉症にやさしい社会の条件—市民の自閉症認識に関する調査研究」）ののち、議論。	研究者
2010年 6月14日	勉強会	大阪大学吹田 キャンパス人間科学研究科東館	徳島大学大学院檜田美雄准教授による話題提供（演題：「発達障害のビデオエスノグラフィー」）の後ビデオデータセッションの実施。	研究者
2010年 6月22日	第1回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	石川県広坂庁舎	市民を対象に、研究者4名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 7月3日	自閉症サイエンスカフェ @木の花おやじの会	木の花幼稚園	研究者による情報提供ののち、ファシリテーターの補助のもとグループに分かれて議論。	園児父親
2010年 7月8日	自閉症サイエンスカフェ @木の花幼稚園	金沢市教育プラザ富樫	研究者による情報提供ののち、議論。	園児保護者
2010年 7月14日	第3回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	金沢大学子どものこころの発達研究センター棟居俊夫准教授による話題提供（演題：「オキシトシンと発達障害」）ののち、議論。	研究者
2010年 7月22日	第2回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	石川県広坂庁舎	研究者2名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 7月26日	託児サービス従事者向け サイエンスカフェ	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議室	研究者による自閉症についての話題提供ののち、質疑応答と議論。	託児サービスの保育職員
2010年 7月31日	お父さん対象 自閉症サイエンスカフェ:合宿スタイル	石川県青少年 総合研修センター	合宿形式のカフェが行われた。2名の研究者による話題提供ののち、議論。	木の花幼稚園に通う幼児の父親を対象
2010年 8月22日	第3回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	しいのき迎賓館	研究者4名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 9月8日	第4回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	金城大学社会福祉学部大井佳子教授による話題提供（演題：「発達障害と幼児教育」）ののち、議論。	研究者・学生

2010年 9月12日	自閉症にやさしい社会の実現に向けたコンセンサス会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」 Day1	金沢 21 世紀 美術館	脳科学や生命科学、精神医学や教育、心理学、倫理学など種々の研究者により、自閉症及び自閉症をとりまく諸問題について、基本情報の提供。	公募により 選ばれた市 民委員
2010年 9月22日	第4回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	石川県広坂庁 舎	研究者3名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 10月13日	第5回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	金沢大学大学教育開発・支援センター青野透教授による話題提供（演題：「自閉症に優しい大学①—授業を変える—」ののち、議論。	研究者・学生
2010年 10月17日	自閉症にやさしい社会の実現に向けたコンセンサス会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」 Day2	石川県広坂庁 舎	9月12日の情報提供に基づき、市民らが班に分かれて自閉症にやさしい社会に関する議論。	公募により 選ばれた市 民委員
2010年 10月22日	第5回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	石川県広坂庁 舎	研究者3名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 11月10日	第6回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	ASDアトリスク当事者I氏による話題提供（演題「自閉症と就労・職場でのコミュニケーションなど」）ののち議論。	研究者・学生
2010年 11月14日	自閉症にやさしい社会の実現に向けたコンセンサス会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」 Day3	しいのき迎賓 館	10/17の議論をさらに発展させ、金沢にゆかりの深い梅鉢模様がプリントされた用紙に、各班が最も「社会に伝えたいこと」をまとめ上げた提言を発表。	公募により 選ばれた市 民委員
2010年 11月21日	自閉症サイエンスカフェ @引きこもりの子をもつ 親の会	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議 室	研究者2名による話題提供ののち、質疑応答と議論。	引きこもりの 子どもをも つ親の会 の会員
2010年 11月22日	第6回カフェで語ろう!!! 「自閉症」	石川県広坂庁 舎	研究者2名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2010年 12月8日	第7回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間 キャンパス 中央図書館	東京大学大学院総合文化研究科石原孝二准教授による話題提供（演題：「自閉症研究の ELSI と社会的意義」）ののち、議論。	研究者・学生

2010年 12月19日	第1回自閉症の未来を考える会	しいのき迎賓館	社会の中の自閉症問題に対する関心の高い市民や研究者が、自閉症にやさしい社会への実現へむけて議論。	市民・研究者・メディア関係者
2010年 12月20日	大学生による自閉症認識に関するランチョントーク	金沢大学角間キャンパス中央図書館	大学生により、自閉症スペクトラム指数(AQ)質問紙の実施にかかわる議論。	大学生
2010年 12月22日	第7回カフェで語ろう!!!「自閉症」	石川県広坂庁舎	市民を対象に、研究者4名を交えて「自閉症」について話し合った。	市民
2011年 1月12日	第8回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学角間キャンパス中央図書館	金沢大学大学院医学系研究科東田陽博教授による話題提供(演題:自閉症の原因遺伝子と治療:オキシトシンをめぐる)ののち、議論。	研究者・学生
2011年 1月22日	第8回カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民を対象に、研究者2名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2011年 2月4日	自閉症サイエンスカフェ@木の花幼稚園	金沢市教育プラザ富樫	研究による情報提供ののち、議論。	木の花幼稚園の保護者
2011年 2月5日	第9回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学宝町キャンパス十全講堂会議室	精療発達障害研究所・精療クリニック小林 白瀧貞昭医師による話題提供(演題:ASDと語用論的障害)ののち、議論。	研究者・学生
2011年 2月20日	第2回自閉症の未来を考える会	金沢大学宝町キャンパス十全講堂会議室	第1回に引き続き、社会の中の自閉症問題に対する関心の高い市民や研究者が、自閉症にやさしい社会への実現へむけて議論。	市民・研究者・メディア関係者
2011年 2月22日	第9回カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民を対象に、研究者2名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民
2011年 3月9日	第10回「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学宝町キャンパス十全講堂会議室	大井学プロジェクト代表による平成22年度RISTEX研究プロジェクトの総括とともに、自閉症当事者M氏を招き、対談・議論。	研究者・学生
2011年 3月22日	第10回カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民を対象に、研究者2名を交えて「自閉症」について話し合い。	市民

2011年 4月22日	第11回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民11人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 4月24日	第3回 自閉症の未来を考える会	金沢大学宝町キャンパス・十全講堂	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が、自閉症にやさしい社会への実現へむけて、自閉症と教育・就労、「自閉症特区」について議論。	市民・研究者・メディア関係者
2011年 5月22日	第12回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民14人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 6月12日	第4回 自閉症の未来を考える会	石川県立美術館 広坂別館	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が、医療、就労、教育のそれぞれの分野の話題提供と議論を行い、この会の今後のあり方も議論。	市民・研究者・メディア関係者
2011年 6月18日	第1回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ／明文堂書店 金沢県庁前本店	人文社会系研究者、市民、アスペルガー症候群の当事者が書評を行い、カフェの参加者も交えて議論。	市民
2011年 6月22日	第13回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民27人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 7月22日	第14回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民24人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 8月7日	第5回 自閉症の未来を考える会	金沢ビーンズ／明文堂書店 金沢県庁前本店	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が、自閉症と就労の問題と自閉症特区の実現するための課題について議論。	市民・研究者・メディア関係者
2011年 8月7日	第2回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ／明文堂書店 金沢県庁前本店	医学系研究者、人文社会系研究者、アスペルガー症候群の当事者が書評を行い、カフェの参加者も交えた議論。	市民

2011年 8月22日	第15回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民13人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 9月10日	市民と研究者のおしゃべりカフェ	天神町緑地公園管理棟	自閉症と直接関係のない町内会のメンバーと研究者が自閉症や発達障害について意見交換を実施。	市民
2011年 9月11日	第11回 「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学宝町キャンパス・十全講堂	山梨大学大学院社会医学講座の山縣然太郎教授による話題提供（演題：多施設共同による疫学研究における研究ガバナンス）ののち、議論。	研究者・学生
2011年 9月22日	第16回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民18人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 10月8日	自閉症サイエンスバー「あなたの隣の自閉症」	木の花幼稚園	研究者とアスペルガー症候群の当事者が、園児の父親を対象とした報告を行い、発達障害について意見交換を実施。	園児父親
2011年 10月22日	第17回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民12人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2011年 10月28日	保育園カフェ	のぞみ保育園	保育士と研究者が発達障害のある子どもへの対応などを話し合い。	保育士
2011年 10月30日	第6回 自閉症の未来を考える会	金沢ビーンズ／明文堂書店 金沢県庁前本店	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が、教育・就労の課題、市民・大学・行政の連携のあり方について議論。	研究者・学生
2011年 10月30日	第3回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ／明文堂書店 金沢県庁前本店	医学系研究者とアスペルガー症候群の当事者が書評を行い、カフェの参加者も交えた議論。	市民
2011年 11月22日	第18回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民21人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民

2011年 11月22日	保育園カフェ	のぞみ保育園	園児の保護者、保育士、研究者、発達障害の当事者が参加して、子どもの発達障害について議論。	園児保護者・保育士
2011年 12月3日	美大カフェ	金沢美術工芸大学	医学系研究者（2名）が話題提供を行ったのち、人文社会系研究者（2名）、アスペルガー症候群の当事者、金沢美術工芸大学の学生が議論。	金沢美術工芸大学学生
2011年 12月4日	第7回 自閉症の未来を考える会	金沢ビーンズ ／明文堂書店 金沢県庁前本店	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が、情報発信のあり方や今後の組織作りについて議論。	市民・研究者・メディア関係者
2011年 12月4日	第4回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ ／明文堂書店 金沢県庁前本店	人文社会系研究者、医学系研究者、アスペルガー症候群の当事者が書評を行い、カフェの参加者も交えた議論。	市民
2011年 12月22日	第19回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民17人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2012年 1月22日	第20回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民21人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
2012年 1月29日	第12回 「自閉症に優しい社会」研究会	金沢大学宝町 キャンパス・ 十全講堂	京都府立大学公共政策学部の中根成寿准教授による話題提供（演題：「障害者会社会家族と社会、地域生活のための制度設計について」）ののち、議論。	研究者・学生
2012年 2月5日	第8回 自閉症の未来を考える会	金沢ビーンズ ／明文堂書店 金沢県庁前本店	自閉症問題に関心の高い市民や研究者が集まり、発達障害の早期発見に関する議論と、「協議会」発足の課題について意見交換を実施。	市民
2012年 2月5日	第5回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ ／明文堂書店 金沢県庁前本店	人文社会系研究者（2名）とアスペルガー症候群の当事者が書評を行い、カフェの参加者も交え議論。	市民

2012年 2月19日	RISTEX 大阪研究会	大阪大学吹田 キャンパス人間科 学研究科東館	人文社会系研究者の研究者 (2名)による研究報告と ディスカッションを実施。	研究者・学生
2012年 2月22日	第21回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民15人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民
2012年 2月25日 ～26日	「大阪大学医療人文学研 究会」との合同研究会	KKR ホテル 金沢	医学、教育学、社会学、人 類学、倫理学等を専門にす る研究者が参加し、自閉症 や発達障害について議論。	研究者
2012年 3月13日	第13回 「自閉症に優しい社会」研 究会	金沢大学附属 病院カンファ ランスルーム	金沢大学人間社会学域学校 教育学類の武居渡准教授の 話題提供(演題「障害の早 期発見を支える療育システ ムの構築」)ののち、議論。	研究者・学生
2012年 3月22日	第22回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民19人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民
2012年 4月1日	第6回 本屋さんカフェ	金沢ビーンズ ／明文堂書店 金沢県庁前本 店	医学系研究者、幼稚園教諭、 小学生の母親が書評を行 い、カフェの参加者も交え 議論。	市民
2012年 4月17日 ～20日	ランチョンカフェ「人間関 係について考えよう」	金沢大学総合 教育棟 A2 教 室	金沢大学の1・2年生を主な 対象に、4日間にわたり、 人間関係全般から発達障害 についての講演を実施。	金沢大学学 生
2012年 4月22日	第23回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民21人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民
2012年 4月22日	第1回 自閉症の未来協議会会合	金沢21世紀 美術館1階会 議室1	市民熟議2012金沢「自閉 症、聞いて話して考える」 の検討。	協議会メン バー
2012年5 月12日	第2回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	市民熟議2012金沢「自閉 症、聞いて話して考える」 の検討。	協議会メン バー
2012年 5月22日	第24回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民25人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民

2012年 6月1~2日	自閉症 ELSI 会議 in 小松 (小松会議)	ホテルグラン ティア小松エ アポート	哲学、教育学、法学、医学 系研究者が、合宿形式で自 閉症 ELSI を議論。	研究者
2012年 6月3日	第3回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	市民熟議 2012 金沢「自閉 症、聞いて話して考える」 の検討。	協議会メン バー
2012年 6月22日	第25回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民15人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民
2012年 6月24日	第4回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	市民熟議 2012 金沢「自閉 症、聞いて話して考える」 の検討。	協議会メン バー
2012年 7月8日	第5回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	市民熟議 2012 金沢「自閉 症、聞いて話して考える」 の検討。	協議会メン バー
2012年7 月15日	市民熟議 2012 金沢 「自閉症、聞いて話して考 える」第1日	しいのき迎賓 館	「自閉症の未来協議会」と の共催で、公募市民による 自閉症の早期発見や支援に ついての議論。	公募による 市民参加者
2012年 7月29日	市民熟議 2012 金沢 「自閉症、聞いて話して考 える」第2日	しいのき迎賓 館	「自閉症の未来協議会」と の共催で、公募市民による 自閉症の早期発見や支援に ついての議論。	公募による 市民参加者
2012年 8月18日	第6回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	金沢市への政策提言の内容 の検討。	協議会メン バー
2012年 8月22日	第26回 カフェで語ろう!!!「自閉 症」	しいのき迎賓 館	市民10人が参加して、研究 者と自閉症や発達障害、関 連するトピックについて話 し合い。	市民
2012年 9月1日	第7回 自閉症の未来協議会会合	金沢大学角間 の里	金沢市への政策提言の内容 の検討	協議会メン バー
2012年 9月15日	自閉症サイエンスカフェ @あすなる親の会	金沢大学宝町 キャンパス 十全講堂会議 室	棟居俊夫金沢大学子どもの こころの発達研究センター 特任教授による話題提供 (演題:「大人の発達障害」) ひきこもりの子を持つ親と 話し合い。	ひきこもり の子をもつ 親



2012年 9月22日	第27回 カフェで語ろう!!!「自閉症」	しいのき迎賓館	市民11人が参加して、研究者と自閉症や発達障害、関連するトピックについて話し合い。	市民
----------------	-------------------------	---------	---	----

### 3-4. 今後の成果の活用・展開に向けた状況

本プロジェクトの目標である「社会実験を通してのLCCCAモデルの提案」については、「自閉症の未来協議会の設立」と、同協議会による金沢市への「自閉症児の療育に関する包括的支援の必要性の提言」という段階まで到達できた。金沢大学と金沢市は連携関係にあり、今後は、本プロジェクト研究実施者の多くが所属する金沢大学子どもこころの発達研究センターが金沢市との連携のハブ機能を担い協働関係をより強固なものとし、あわせて自閉症に関する科学的知見の提供を引き続き行っていく。

これらの成果を踏まえ、市民や行政による「社会的課題の提起」に対し、大学が「科学的エビデンス」を提供するという体制で、「大学・行政・市民の協働による社会システムの変革」を志向している。具体的目標は以下の通りである。

#### ①学際科学としての「自閉症科学」基盤整備

本プロジェクトは、これまで医療、福祉、教育など個別の領域で扱われていたHFASDを広く社会一般における共通課題（「社会問題としての自閉症」）として捉え、一定の成果を挙げた。今後は、ライフコース疫学研究の成果を取り入れ、学際科学としての「自閉症科学」の基盤整備に努める。

#### ②自閉症科学と政策をつなぐ道筋の確立

本プロジェクトが議論の対象とした自閉症の早期発見技術は、医療、教育、福祉、研究のみならず、産業振興とも関連する側面がある。自閉症科学の対象を広げることで、産官学連携のモデルケースを提示する。

#### ③行政・市民によって提起された社会的課題への対応

自閉症科学の中心に、大学がエビデンスの提供が可能な課題について、サイエンスショップを実質化し、市民の科学リテラシー向上を目指す。

#### ④地方行政を中心としたボトムアップ型の政策形成

本プロジェクトは、金沢という中規模都市の特性を活かした研究開発事業である。これらを他の中規模都市へ移転・展開可能な応用モデルとして可能性を検討する。

### 3-5. プロジェクトを終了して

プロジェクトの進捗管理のために、各グループの代表者を中心としたミーティングを2週間に1回程度開催し、研究開発状況の進捗状況の確認や計画の検討、実施後の事後検討を行った。プロジェクト雇用の研究員が各グループ間の連絡役を担い、ミーティングでの決定事項を各グループにフィードバックできるように、議事録の作成を行った。ミーティングでは、事業実施計画に基づき、具体的な研究開発の取り組み内容と、準備および実施担当者などの決定を行った。また、メーリングリストを活用し、各取り組みについての連絡事項や催しに関する情報を投稿することで、研究実施者全員がプロジェクト全体の研究開発進展状況の把握をできるようにした。さらに、進捗状況に合わせ、各グループ内でも適宜ミーティングを行い、その内容を統括グループに報告するようにして、進捗の管理に努めた。これらとは別に、代表者を含む本プロジェクト研究実施者が多数所属する、金沢大学子どものこころの発達研究センターのカンファレンスも情報共有の場として活用され、プロジェクトに関する情報伝達は滞りなく行われた。

また、各種自閉症サイエンスカフェ、金沢会議 2010 及び 2011、市民熟議 2012 などの催しを実施した際にはアンケートを実施し、参加者の動向の把握に努めた。アンケート結果の集計から、参加者の職業や性別、自閉症との関連などの属性や意識等を適宜モニタリングし、実施中のアプローチの改善や新しい企画の開発につなげた。一例を挙げると、23 年度までの自閉症サイエンスカフェの参加者に占める若年層の割合が小さいことがわかり、24 年度は学生を対象としたセミナー型カフェを実施することによって若年層の取り込みを図った。

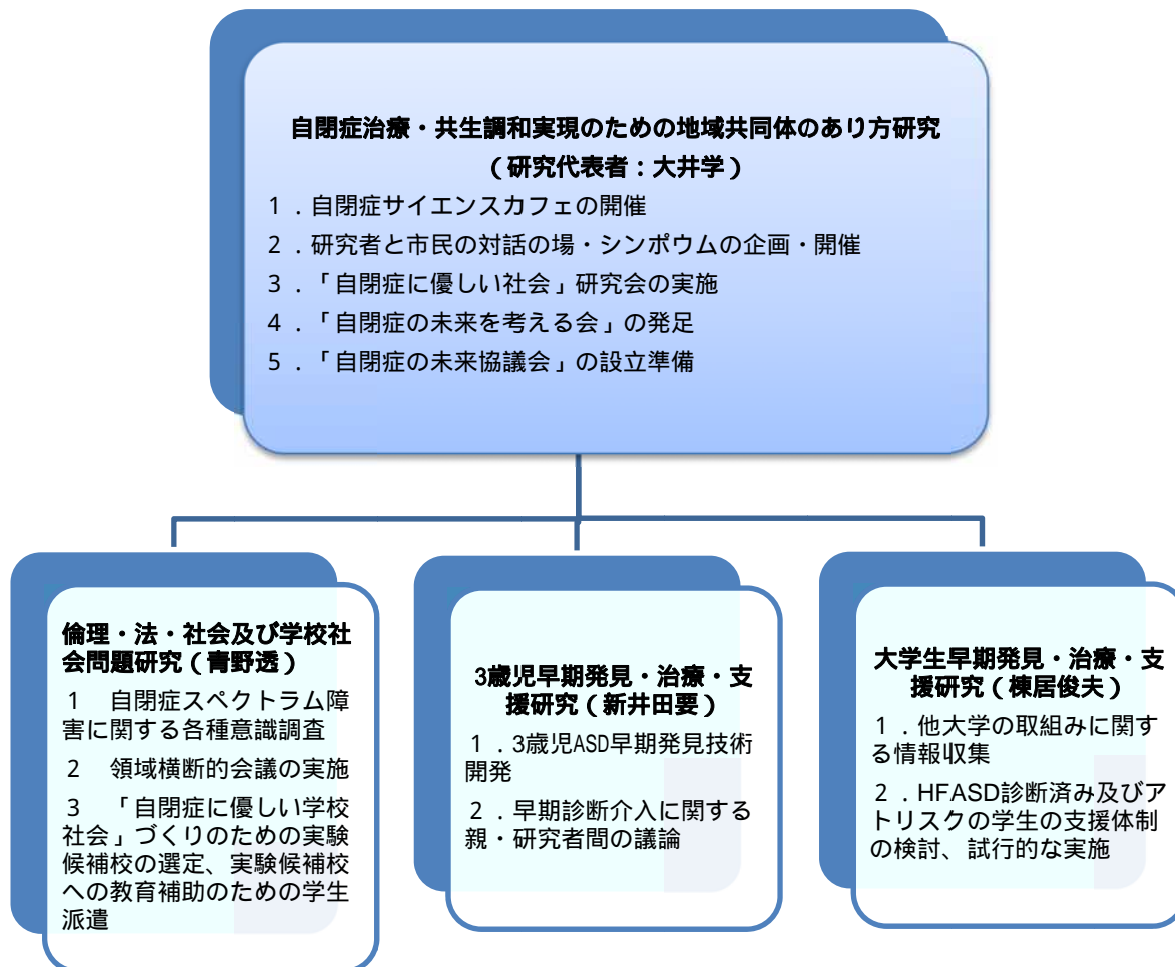
さらに、各種サイエンスカフェでは、アンケート結果の集計あるいは参加者からの声に基づいて、話題提供者に対して改善個所などのアドバイスを適宜行った。また、自閉症の未来協議会との共催である「市民熟議 2012 金沢」では、協議会の会合の場において話題提供者の報告内容を事前にチェックすることによって、より市民に理解しやすい内容に変更するなどの対応を行った。

本プロジェクトで雇用した研究員の内 2 名が、平成 23 年度より金沢大学付属子どものこころの発達研究センターのコミュニケーション開拓部門と社会技術部門にそれぞれ特任助教として採用され、採用後も本プロジェクトの研究実施者として研究開発に貢献している。また、他の 1 名は日本学術振興会特別研究員 (PD) として、他大学で研究活動を継続している。また、本プロジェクトで雇用した研究員のなかには、研究成果のアウトリーチや市民とのコミュニケーションとはやや縁遠い研究に従事している者もいた。しかし、そうした研究員も含め、プロジェクトで雇用した研究員は、目標達成のためにアプローチに取り組むことで、社会リテラシーを向上させ、LCCCA モデルの社会実装である自閉症の未来協議会の立ち上げや運営の面で多大な貢献をみせた。これは、社会の側と協働するために必要な研究者としての能力を身につけた結果である。本プロジェクトで費やした人件費については、研究開発目標の達成に合わせ、上記の社会リテラシーの向上という成果から、高く評価されるべきである。また、本プロジェクトでは多くの大学生を雇用している。発達障害児学習補助のために地元小学校へ金沢大学の学生を派遣することで、現場体験の機会を与えた。採用時には派遣した大学生は、小・中学校の教員として勤務する予定であり、雇用時の経験は実務にあたり大いに役立つものであった。

本プロジェクトと金沢大学の人材育成事業との関連では、日本学術振興会「組織的な若手研究者等海外派遣プログラム」との連携を挙げることができる。一例として、米国人研究者を、本プロジェクト実施の国際シンポジウムでスピーカーとして招聘したことがきっかけとなり、当該研究者が、同海外派遣プログラムの助成による本学の大学院生の短期海外留学に際しての、ホストリサーチャーを引き受けたことが挙げられる。

#### 4. 研究開発実施体制

##### 4-1. 体制



##### 4-2. 研究開発実施者

###### ①治療・共生調和実現のための地域共同体のあり方研究グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
大井 学	金沢大学人間社会研究域学校教育系	教授	LCCCA 構築と地域接続のあり方検証	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
東田 陽博	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任教授	遺伝研究の社会リテラシー検証	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月
三邊 義雄	金沢大学医薬保健研究域医学系	教授	臨床医学の社会リテラシー検証	平成 21 年 10 月～平成 24 年 9 月

井上 英夫	金沢大学人間社会研究域法学系	教授	市民・行政・大学連携のあり方検証	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
竹中 均	金沢大学人間社会研究域(早稲田大学文学大学院)	客員教授 (教授)	共生治療調和社会のあり方検証	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
荷方 邦夫	金沢大学子どものこころの発達研究センター(金沢美術工芸大学)	客員准教授(准教授)	市民・行政・大学連携のあり方検証	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 9 月
石原 孝二	金沢大学子どものこころの発達研究センター(東京大学大学院総合文化研究科)	客員准教授(准教授)	共生治療調和社会のあり方検証	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 9 月
竹内 慶至	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任助教	LCCCA 構成接続過程の微視検証	平成 21 年 12 月 ～平成 24 年 9 月
工藤 直志	金沢大学人間社会研究域学校教育系	修士研究員	LCCCA 構成接続過程の微視検証	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 9 月

## ②倫理・法・社会問題及び学校社会研究グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
青野 透	金沢大学大学教育開発・支援センター	教授	早期発見・治療の法的問題解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
山野 之義	金沢大学子どものこころの発達研究センター(金沢市)	協力研究員(市長)	治療共生社会と自治体行政の関連解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
柴田 正良	金沢大学人間社会研究域人間科学系	教授	治療共生調和原理の倫理哲学的解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
西山 宣昭	金沢大学大学教育開発・支援センター	センター長・教授	自閉症脳科学リテラシー教育の検証	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
田邊 浩	金沢大学人間社会研究域人間科学系	准教授	社会の自閉症認識の多元的解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
松田 洋介	金沢大学人間社会研究域学校教育系	准教授	学校社会の自閉症認識解明と社会実験	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月

河合 隆平	金沢大学人間社会研究域学校教育系	准教授	学校社会の自閉症認識解明と社会実験	平成 21 年 12 月 ～平成 24 年 9 月
東島 仁	金沢大学大学教育開発・支援センター	博士研究員	児童生徒学生の自閉症脳科学リテラシー解明	平成 22 年 4 月 ～平成 23 年 3 月
永田 伸吾	金沢大学大学教育開発・支援センター	博士研究員	児童生徒学生の自閉症脳科学リテラシー解明	平成 23 年 4 月 ～平成 24 年 9 月

### ③3 歳児早期発見・治療・支援研究グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
新井田 要	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任准教授	保育者・保健師・保護者・専門家の連携システム解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
大井 佳子	金沢大学子どものこころの発達研究センター(北陸学院大学)	協力研究員(教授)	早期発見・治療体制のあり方解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
菊知 充	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任准教授	脳機能計測手法の社会実装の条件検討	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
小島 治幸	金沢大学人間社会研究域人間科学系	准教授	脳機能計測課題の社会的妥当性検証	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
武居 渡	金沢大学人間社会研究域学校教育系	准教授	早期発見・治療体制のあり方解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
桑名 亜紀	金沢大学人間社会研究域学校教育系	技術補佐員	保育者・保護者の早期発見認識調査	平成 22 年 4 月 ～平成 24 年 9 月

### ④大学生早期発見・治療・支援研究グループ

氏名	所属	役職	担当する研究開発実施項目	参加時期
棟居 俊夫	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任教授	診断確定・疑い学生精神医学的評価と学生・教職員のリテラシー獲得の検証、オキシトシン臨床治験可否の学生・教職員の認識検証	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月
鈴木 健一	金沢大学子どものこころの発達研究センター(名古屋大学学生相談センター)	客員准教授(准教授)	診断確定・疑い学生の心理的支援解明	平成 21 年 10 月 ～平成 24 年 9 月

足立 由美	金沢大学保健管理センター	講師	診断確定・疑い学生の心理的支援解明	平成23年4月～平成24年9月
荒木 友希子	金沢大学人間社会研究域人間科学系	准教授	大学生の自閉症認識調査 AQ 意向調査	平成21年10月～平成24年9月
高橋 和子	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任助教	就労社会性支援体制のあり方検証	平成21年10月～平成24年3月
三浦 優生	金沢大学子どものこころの発達研究センター	特任助教	AQ 早期発見社会実装検討過程の解明	平成22年5月～平成24年9月
田中 早苗	金沢大学子どものこころの発達研究センター	修士研究員	AQ 早期発見社会実装検討過程の解明	平成23年4月～平成24年8月
野島 那津子	金沢大学子どものこころの発達研究センター	修士研究員	AQ 早期発見社会実装検討過程の解明	平成24年9月～平成25年3月 (成果取り纏めの期間のみ雇用)

#### 4-3. 研究開発の協力者・関与者

氏名・所属・役職（または組織名）	協力内容
自閉症の未来を考える会	自閉症にやさしい社会への実現に向けた議論
自閉症の未来協議会	市民熟議2012 金沢、金沢市への政策提言の検討
保健師（3名）	協議会と金沢市の連携に向けた議論の場への参加
樫田美雄 徳島大学大学院ソシオ・アート・アンド・サイエンス研究部 准教授	ビデオエスノグラフィーの紹介と質疑応答
田中優子 九州大学大学院医学研究科 研究員	JSTプロジェクト3歳児早期発見支援研究グループへの助言と勉強会
秋元雄史 金沢21世紀美術館 館長	ラジオ番組「Golden まなびい on “ザ・ラジオ”」にて大井学教授と対談
木の花幼稚園保護者会	自閉症サイエンスカフェの開催協力
NPO 法人子育て支援「さくらっこ」	自閉症サイエンスカフェの開催協力
あすなる親の会 (引きこもりの子を持つ石川県内の親の会)	自閉症サイエンスカフェの開催協力

天徳幼稚園	自閉症サイエンスカフェの開催協力
NPO 法人アスぺの会石川	自閉症サイエンスカフェの開催協力、 共同調査の実施
岡田直樹 自民党参議院議員	企業家カフェへの参加
のぞみ保育園	保育園カフェの開催協力
徳法寺住職	お寺カフェの開催協力
金沢ビーンズ／明文堂書店金沢県庁前本店	本屋さんカフェの開催協力
金沢美術工芸大学	美大カフェの開催協力
金沢市暁町向陽会	「市民と研究者のおしゃべりカフェ」 開催協力
I 氏 ASD アトリスク当事者	「自閉症に優しい研究会」での話題提供
白瀧貞昭 精療発達障害研究所・精療クリニック小林 医師	「自閉症に優しい社会」研究会での話題提供
山縣然太郎 山梨大学大学院社会医学講座 教授	「自閉症に優しい社会」研究会での話題提供
中根成寿 京都府立大学公共政策学部 准教授	「自閉症に優しい社会」研究会での話題提供
沼田直子 石川県健康福祉部少子対策監室 担当課長	「市民・支援者・当事者・家族・専門家のための自閉症サイエンスセミナー」登壇者
越田理恵 金沢市福祉健康局 こども福祉課長	「市民・支援者・当事者・家族・専門家のための自閉症サイエンスセミナー」登壇者
鷺田清一 大阪大学 総長	金沢会議 2010 での講演
大堀耕太郎 早稲田大学理工学術院 助手	金沢会議 2010 のファシリテーター
加納圭 京都大学物質・細胞総合システム拠点 (iCeMS) 特任講師	金沢会議 2010 のファシリテーター
藪田恵美	金沢会議 2010 のファシリテーター
高橋可江 北海道大学 CoSTEP2005 年度修了生	金沢会議 2010 のファシリテーター
田原敬一郎 (財) 未来工学研究所政策科学研究センター	金沢会議 2010 のファシリテーター
中村征樹 大阪大学全学教育推進機構 准教授	金沢会議 2010 のファシリテーター

西条辰義 大阪大学社会経済研究所 教授	金沢会議 2011 での話題提供
堀家慎一 金沢大学学際科学実験センター 准教授	金沢会議 2011 での話題提供
川田学 北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 准教授	金沢会議 2011 での話題提供
須田治 首都大学東京人文科学研究科 教授	金沢会議 2011 での話題提供
藤野博 東京学芸大学総合教育科学系 教授	金沢会議 2011 での話題提供
綾屋紗月 東京大学先端科学技術研究センター 研究員	金沢会議 2011 でのコメンテーター
熊谷晋一郎 東京大学先端科学技術研究センター 特任講師 小児科医	金沢会議 2011 でのコメンテーター
M 氏 自閉症当事者	金沢会議 2011 でのコメンテーター、 「自閉症に優しい社会」研究会で研究者と対談
山中浩司 大阪大学大学院人間科学研究科 教授	大阪大学医療人文学研究会との合同研究会での話題提供
真柄希里穂 大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程	大阪大学医療人文学研究会との合同研究会での話題提供
末次有加 大阪大学大学院人間科学研究科 博士後期課程	大阪大学医療人文学研究会との合同研究会での話題提供、RISTEX 大阪研究会参加者
池田光穂 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター 教授	大阪大学医療人文学研究会との合同研究会でのコメンテーター
Deborah R. Barnbaum Professor, Department of Philosophy, Kent State University	国際シンポジウム「自閉症と社会」登壇者
黄 愷芬 台東大学幼児教育学系 副教授	国際シンポジウム「自閉症と社会」登壇者
陳 秀鳳 台北縣自閉症潜能發展中心 主任	国際シンポジウム「自閉症と社会」登壇者
前田泰一 NPO 法人 アスぺの会石川 副会長	国際シンポジウム「自閉症と社会」登壇者
高井賢二 社会福祉法人さっぽろひかり福祉会 パン工房ひかり 所長	国際シンポジウム「自閉症と社会」登壇者



霜田求 京都女子大学現代社会学部 教授	「自閉症 ELSI 会議」 in 小松への参加 および倫理的立場からのアドバイス
保田直美 日本学術振興会特別研究員（早稲田大学）	RISTEX 大阪研究会参加者
小菅雅行 大阪大学大学院文学研究科 博士後期課程	RISTEX 大阪研究会参加者
山口真紀 立命館大学大学院先端総合学術研究科 博士後期課程	RISTEX 大阪研究会参加者

## 5. 成果の発信やアウトリーチ活動など

### 5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

年月日	名称	場所	参加人数	概要
2009年 11月7日	市民・支援者・当事者・ 家族・専門家のための自 閉症サイエンスセミナー	IT ビジネス プラザ武蔵	100人	自閉症を巡る研究・対策に ついて、医学系・教育学系 研究者ならびに自治体の担 当者が報告を行った。
2010年 11月26 日、27 日	第1回子どものこころの サミット	金沢大学附 属病院宝ホ ール	200人	金沢会議でまとまった提言 を含め、本プロジェクトの 成果報告を行うとともに、 市民と討論を行った。
2011年 10月9 日～10 日	「自閉症の諸科学の協 働：脳・こころ・社会」 金沢会議 2011	しいのき迎 賓館	73人	10近い学問分野の研究者が 当事者を交えて集まり、2日 間にわたり自閉症に関する 問題を議論した。本プロジ ェクトの研究開発実施者の うち、大井学、東田陽博、 石原孝二、竹内慶至、棟居 俊夫、菊知充、田邊浩、竹 中均、柴田正良が報告を行 った。
2012年 3月18 日	市民との対話：文部科学 省 脳科学研究戦略推進 プログラム主催 自閉症 脳科学カフェ、国際シン ポジウム「自閉症と社会」 (第2回子どものこころ のサミット3日目)	21世紀美術 館シアター 21	64人	自閉症に関する脳科学、倫 理学、企業の試みについて、 海外の研究者・支援者を交 え、報告・議論を行った。

## ① 論文以外の発行物

- 青野透, 2010, 「学生支援」 早田幸政・諸星裕・青野透編『高等教育論入門』ミネルヴァ書房, 117-30.
- 大井学, 2010, 「少年期・青年期における高機能広汎性発達障害者へのコミュニケーション支援」 秦野悦子編『生きたことばの力とコミュニケーションの回復』金子書房.
- 河合隆平, 2012, 『総力戦体制と障害児保育論の形成—日本障害児保育史研究序説—』緑蔭書房.
- 河合隆平・丸山啓史・品川文雄, 2012, 『発達保障ってなに?』全国障害者問題研究会出版部.
- 工藤直志, 2012, 「第6章 障害一般に対する市民の意識」, 「第7章 科学技術に対する市民の意識」 金沢大学「障害と医療・福祉」研究会「発達障害に関する市民意識」『白山市調査研究報告書』, 53-62.
- 柴田正良, 2012, 「ロボットの哲学」 戸田山和久・出口康夫編『応用哲学を学ぶ人のために』世界思想社, 123-134.
- 柴田正良, 2012, 「自由な行為者としてのロボット」 戸田山和久・美濃正・出口康夫編『これが応用哲学だ!』大隅書店, 135-143.
- 高橋和子, 2010, 『高機能自閉症児を育てる——息子・Tの自立を育てた20年の記録』小学館.
- 竹内慶至, 2012, 「市民は発達障害をどのように考えているのか」 金沢大学「障害と医療・福祉」研究会「発達障害に関する市民意識」『白山市調査研究報告書』, 7-16.
- 竹中均, 2012, 『精神分析と自閉症：フロイトからヴィトゲンシュタインへ』講談社.
- 田邊浩, 2012, 「第1章 白山市民調査の概要」, 「第3章 発達障害のある人々に対する支援」, 「第5章 市民の『障害観』と『障害者観』」 金沢大学「障害と医療・福祉」研究会『発達障害に関する市民意識』白山市調査研究報告書, 1-6, 17-24, 45-52.
- 東田陽博・棟居俊夫, 2012, 『発達障害白書2013年版』明石書店.
- 松田洋介, 2012, 「第4章 市民の発達障害観と学校ガバナンスのゆくえ」 金沢大学「障害と医療・福祉」研究会『発達障害に関する市民意識』白山市調査研究報告書, 25-44.
- 三邊義雄, 2012, 「Lateralized theta wave connectivity and language performance in 2- to 5-old children」『子どものこころと脳の発達』金芳堂.
- Munesue, T., Ashimura, K., Nakatani, H., Kikuchi, M., Yokoyama, S., Oi, M., Higashida, H., Minabe, Y., 2012, “Is intranasal administration of oxytocin effective for social impairments in autism spectrum disorder?,” *Neuroendocrinology and Behavior*, In Tech, Croatia.
- Shibata, M., 2011, “Toward robot ethics through the Ethics of Autism,” J. L. Krichmar and H. Wagatsuma (eds.), *Neuromorphic and Brain-Based Robots*, Cambridge U. P., 345-61.

## ② ウェブサイト構築

- ・金沢大学 RISTEX  
URL : <http://ristex-kanazawa.w3.kanazawa-u.ac.jp/top1.htm>  
開設年月 : 2009年10月29日  
内容 : 自閉症サイエンスカフェ議事録掲載、自閉症研究の市民向け動画公開、D. Barnbaum 博士の自閉症倫理学講演(通訳付)動画公開。
- ・カフェで語ろう!「自閉症」公式ブログ  
URL : <http://d.hatena.ne.jp/cafe22/>  
開設年月 : 2010年7月12日

内容：石川県金沢市中心部で毎月 22 日に開催している“カフェで語ろう！「自閉症」に関する情報を掲載。

・金沢大学「障害と医療・福祉」研究会

URL：<http://ristex-kanazawa.w3.kanazawa-u.ac.jp/research/>

開設年月：2011 年 10 月

内容：大学生や金沢市民、白山市民を対象とした意識調査の進捗状況及び調査結果の公開し、また、facebook で作成した研究会のページとリンクして、自閉症や発達障害に関する情報を定期的に発信。

### ③ 学会以外のシンポジウム等への招へいによる講演実施 等

青野透，北陸地区国立大学学術研究連携支援事業公開シンポジウム，「発達障害者の教育におけるトランジションを支える法制度」，2012 年 2 月 12 日，福井県立大学交流センター（福井）。

青野透，高等教育活性化シリーズ 206，「発達障害者支援法による配慮の義務付けと大学設置基準」，2012 年 3 月 23 日，日本教育会館会議室（東京）。

足立由美，大学コンソーシアム石川 FD・SD 研修会，「大学における、発達障害が疑われる学生への支援」，2011 年 7 月 8 日，しいのき迎賓館（石川）。

足立由美，第 23 回地域リハビリテーションフォーラム・障がいの意味と理解—学生へのサポートの立場から，「それぞれの支援の経験から今思うこと」，2011 年 12 月 3 日，富山県総合福祉会館（富山）。

荒木友希子，石川県精神保健福祉協会シンポジウム，「子どもの豊かな育ちのために」，2012 年 2 月 11 日，石川県こころの健康センター（石川）。

竹内慶至，中之島哲学コレージュ／哲学セミナー，テーマ「ケア」，「自閉症スペクトラム障害とのつきあい方？」，2011 年 5 月 27 日，大阪「なにわ駅」構内アートエリア B1（大阪）。

竹内慶至，金沢市天徳幼稚園「幹の会」主催「その子らしさと自閉症」，「自閉症と社会」2012 年 6 月 10 日，金沢市天徳幼稚園（石川）。

東田陽博，サイエンスカフェ，「社会性認識障害から発達障害を考える」，2011 年 8 月 6 日，高鷲町民センター会議室（岐阜）。

東田陽博，Genetic and Molecular Basis of Synapses, Circuits, Memory, Behavior, and Psychological Disorders: In Memory of Dr. Marshall Nirenberg (Brain Memory 2011)，「CD157/BST1 knockout mice: Can be a model of autism spectrum disorders?」，2011 年 9 月 27 日，瑠璃光（石川）。

東田陽博，サイエンスカフェ，「発達障害の 2 次障害について」，2012 年 2 月 22 日，富山市民プラザ（富山）。

東田陽博，グローバル COE 第 5 回国内シンポジウム，「社会性記憶、喪失と自閉症：NAD 代謝産物による脳オキシトシン分泌制御と CD38 の一塩基多型」，2012 年 7 月 19 日，名古屋大学（愛知）。

三邊義雄，飯田病院研修会，「21 世紀の精神医学—子どものこころを中心に」，2010 年 5 月 26 日，医療法人栗山会飯田病院（長野）。

三邊義雄，千葉大学子どものこころの発達研究センター開設記念シンポジウム，「金沢大学子どものこころの発達研究センターの紹介」，2012 年 7 月 12 日，千葉大学（千葉）。

棟居俊夫，平成 23 年度特別支援教育総合推進事業・第 2 回全体研修会，「思春期以降の自閉症スペクトラム障害：理解と支援」，2011 年 8 月 31 日，県立新川みどり野高等学校（富山）。

棟居俊夫，平成 23 年度北陸 4 大学連携まちなかセミナー，「自閉症スペクトラム障害のオキシトシンによる治療の可能性」，2011 年 12 月 3 日，福井大学アカデミーホール（福井）。

## 5-2. 論文発表

(国内誌 38 件、国際誌 21 件)

### 国内誌

- 青野透, 2012, 「大学設置基準における『社会的及び職業的自立を図るために必要な能力』と発達障害者支援法における『適切な教育上の配慮』」『週刊センターニュース (金沢大学 大学教育開発・支援センター)』394.
- 荒木友希子, 2012, 「学習性無力感パラダイムを用いた防衛的悲観主義に関する実験的検討」『健康心理学研究』25(8): 104-113.
- 大井学, 2010, 「高機能自閉症スペクトラム障害の語用障害への根本対処法は現時点で存在しない? 理論とエビデンスなき『コミュニケーション支援』を超え自閉症と共生する支援へ」『アスペハート』24: 22-28.
- 大井学, 2010, 「高機能自閉症スペクトラム障害の語用障害と補償: 伝え合えない哀しみと共生の作法」『子どものこころと脳の発達』1(1): 19-32.
- 大井学, 2010, 「佐藤論文を読んで: 療育現場における専門性・日米文化差・科学哲学」『子どものこころと脳の発達』1(1): 160-68.
- 大井学, 2011, 「高機能自閉症スペクトラム障害、人格、コミュニケーションおよび精神疾患: 軋轢と共生」『北陸神経精神医学雑誌』25(1-2): 1-11.
- 大井佳子, 2010, 「『やりたい気持ち』があふれ出る——一斉ではない「設定保育」の形」『現代と保育』77.
- 菊知充・三邊義雄, 2010, 「子どものこころの生理学——バンビプランの紹介」『脳 21』13: 146-50.
- 金野武司・柴田正良, 2011, 「回帰的意図理解をめざす共同注意ロボット」『科学哲学』44(2): 29-45.
- 柴田正良, 2010, 「異世界の者たちの倫理 自閉症の倫理・ロボットの倫理に向けて」『哲学・人間学論叢創刊号』17-38.
- 柴田正良, 2012, 「記憶喪失と世界喪失——水槽脳になったばかりの人が持つ記憶は元の世界を指示できるか?——」『哲学・人間学論叢』(3): 17-26.
- 武居渡・土田昌作, 2011, 「聴覚障害教育からみる特別支援教育の批判的検討」『コミュニケーション障害学』28(2): 85-92.
- 武居渡, 2012, 「言語を作り出すカーホームサイン研究・手話研究を通じて見えてくるもの——」『ENERGEIA』37: 1-15.
- 竹内慶至, 2010, 「今月の書評『高機能自閉症児を育てる』」『月刊高校教育』11月号: 98.
- 竹内慶至, 2011, 「今月の書評『科学は誰のものか』」『月刊高校教育』8月号: 102.
- 竹内慶至, 2011, 「今月の書評『創造的福祉社会』」『月刊高校教育』11月号: 102.
- 竹内慶至, 2012, 「今月の書評『医療とは何か』」『月刊高校教育』10月号: 100.
- 竹中均, 2010, 「無意味と無価値——ウィトゲンシュタイン・フロイト・自閉症」『思想』1034: 172-94.
- 竹中均, 2010, 「自閉症児の親そして社会学者として——実感と分析」『発達』123: 69-75.
- 竹中均, 2011, 「精神分析・社会学・自閉症——『隠喩』の問題を中心に」『社会学評論』61(4): 386-402.
- 坪内清貴・田平裕美子・増江俊子・菅幸生・小柴美紀恵・前田大蔵・長澤達也・篁俊成・三邊義雄・崔吉道・宮本謙一, 2012, 「非定型抗精神病薬処方時の耐糖能フォローアップの調査結果」『精神医学』54(7): 681-688.

- 新井田要, 2011, 「発達障害の理解と支援—自閉症」『療育』52: 8-17.
- 東島仁・中川智絵・山内保典・三浦優生・高橋可江・中村征樹, 2012, 「自閉症研究と社会にまつわる多様な市民間の対話の試み」『科学技術コミュニケーション』11: 28-43.
- 東田陽博・棟居俊夫, 2010, 「オキシトシンと発達障害」『脳 21』13: 211-4.
- 東田陽博・棟居俊夫・横山茂, 2010, 「自閉症の原因遺伝子と治療—オキシトシンをめぐる」『日本小児心身医学会雑誌』28: 28.
- 東田陽博・小泉恵太・吉原亨・棟居俊夫, 2010, 「オキシトシンとバズプ्रेसリン—社会性認知行動と信頼の神経化学的基盤」『子どものこころと脳の発達』1: 80-9.
- 東田陽博・横山茂・棟居俊夫, 2011, 「CD38 分子機能低下とオキシトシン分泌低下—オキシトシン分泌障害による自閉症サブクラス」『医学の歩み』239: 713-717.
- 東田陽博・棟居俊夫, 2012, 「CD38 の SNP 解析とオキシトシンによる自閉症スペクトラム障害の症状改善」『小児の精神と神経』52(2): 125-131.
- 東田陽博・棟居俊夫・横山茂, 2012, 「自閉症の原因遺伝子と治療: オキシトシンをめぐる」『子どもの心とからだ (児心身誌 (JJSP))』20(1): 30-43.
- 東田陽博, 2012, 「オキシトシン」『分子精神医学』12(1): 44-46.
- 東田陽博, 2012, 「オキシトシン、オキシトシン分泌を制御する CD38 と自閉症」『Clinical Neuroscience』30(2): 205-8.
- 三邊義雄, 2011, 「自閉症の生物学的精神医学研究の発達に必要なこと」『アスペハート』28: 28-29.
- 棟居俊夫, 2010, 「青年期双極性障害と自閉症スペクトラム障害との併存、そしてその薬物療法」『臨床精神薬理』13: 921-6.
- 棟居俊夫, 2011, 「自閉症の生物学的脆弱性を踏まえた支援と治療のために」『アスペハート』28: 58-62.
- 棟居俊夫, 2011, 「自閉症スペクトラム障害における oxytocin の有効性」『日本生物学的精神医学会誌』22(1): 35-38.
- 棟居俊夫, 2012, 「自閉症への支援活動」『小児内科』44(5): 764-766.
- 棟居俊夫, 2012, 「不安障害」『小児科』44(5): 575-580.
- 棟居俊夫, 2012, 「双極性障害の特徴を示す自閉症スペクトラム障害の青年と成人例」『精神科治療学』27(5): 599-603.

#### 国際誌

- Danko, G., González-Burgos, G., Kikuchi, M., Minabe, Y., Lewis, D.A., Hashimoto, T., 2012, "Selective expression of KCNS3 potassium channel  $\alpha$ -Subunit in parvalbumin-containing GABA neurons in the human prefrontal cortex," PLoS One.
- Hayashi, N., Kikuchi, M., Sanade, S., Minabe, Y., Miyati, T., Hachiman, Y., Iida, T., Matsui, O., 2012, "Algorithm for estimation of brain structural location from head surface shape in young children," *NeuroReport*, 23(5): 299-303.
- Higashida, H., O. Lopatina, T. Yoshihara, Y. A. Pichugina, A. A. Soumarokov, T. Munesue, Y. Minabe, M. Kikuchi, Y. Ono, N. Korshunova and A. B. Salmina, 2010, "Oxytocin signal and social behaviour: comparison among adult and infant oxytocin, oxytocin receptor and CD38 gene knockout mice," *Journal of Neuroendocrinology*, 22:373-9.
- Higashida, H., O. Lopatina, A. B. Salmina, Y. A. Pichugina, A. A. Soumarokov and T. Munesue, 2010, "Social behaviour and oxytocin secretion in the brain regulated by CD38 in human and mice," *Recent Advances in Clinical Medicine*, 304-9.
- Higashida, H., S. Yokoyama, T. Munesue, M. Kikuchi, Y. Minabe and Lopatina, O., 2011,

- "CD38 gene knockout juvenile mice: a model of oxytocin signal defects in autism," *Biological & Pharmaceutical Bulletin*, 34(9): 1369-72.
- Higashida, H., Yokoyama, S., Kikuchi, M., Munesue, T., 2012, "CD38 and its role in oxytocin secretion and social behavior," *Hormones and Behaviour*, 61: 351-8.
- Higashida, H., Yokoyama, S., Huang, J., Liu, L., Ma, W., Akther, S., Higashida, C., Kikuchi, M., Minabe, Y., Munesue, T., 2012, "Social memory, amnesia, and autism: Brain oxytocin secretion is regulated by NAD(+) Metabolites and single nucleotide polymorphism of CD38," *Neurochemistry International*, In press, Corrected Proof, Available online 13 February 2012.
- Hirosawa, T., Kikuchi, M., Higashida, H., Okumura, E., Ueno, S., Shitamichi, K., Yoshimura, Y., Munesue, T., Tsubokawa, T., Haruta, Y., Nakatani, H., Hashimoto, T., Minabe, Y., 2012, "Oxytocin attenuates feelings of hostility depending on emotional context and individuals' characteristics," *Scientific Reports*, 2: 384.
- Kikuchi, M., K. Shitamichi, S. Ueno, Y. Yoshimura, G. B. Remijn, K. Nagao, K., T. Munesue, K. Iiyama, T. Tsubokawa, Y. Haruta, Y. Inoue, K. Watanabe, T. Hashimoto, H. Higashida and Y. Minabe, 2010, "Neurovascular coupling in the human somatosensory cortex: a single trail study," *Neuroreport*, 21: 1106-10.
- Kikuchi, M., Shitamichi, K., Yoshimura, Y., Ueno, S., Remijn, G.B., Hirotsawa, T., Munesue, T., Tsubokawa, T., Haruta, Y., Oi, M., Higashida, H., Minabe, Y., 2011, "Lateralized theta wave connectivity and language performance in 2- to 5-year-old children," *The Journal of Neuroscience*, 31: 14984-8.
- Kosaka, H., Munesue, T., Ishitobi, M., Asano, M., Omori, M., Sato, M., Tomoda, A., Wada, Y., 2012, "Long-term oxytocin administration improves social behaviors in a girl with autistic disorder," *BMC Psychiatry*, 12: 110.
- Lopatina, O., Inzhutova, A., Pichugina, Y.A., Okamoto, H., Salmina, A.B., Higashida, H., 2011, "Reproductive experience affects parental retrieval behaviour associated with increased plasma oxytocin levels in wild-type and cd38-knockout mice," *Journal of Neuroendocrinology*, 23: 1125-33.
- Morita, T., Kosaka, H., Saito, D.N., Ishitobi, M., Munesue, T., Itakura, S., Omori, M., Okazawa, H., Wada, Y., Sadato, N., 2011, "Emotional responses associated with self-face processing in individuals with autism spectrum disorders: an fMRI study," *Journal of Clinical Neuroscience* [Epub ahead of print].
- Munesue, T., S Yokoyama, K. Nakamura, A. Anitha, K. Yamada, K. Hayashi, T. Asaka, H. X. Liu, D. Jin, K. Koizumi, M. Islam, J. J. Huang, W. J. Ma, U. H. Kim, S. J. Kim, K., Park, D. Kim, M. Kikuchi, Y. Ono, H. Nakatani, S. Suda, T. Miyachi, H. Hirai, A. Salmina, Y. Pichugina, A. Soumarokov, N. Takei, N. Mori, M. Tsujii, T. Sugiyama, K., Yagi, M. Yamagishi, T. Sasaki, H. Yamasue, N. Kato, R. Hashimoto, M. Taniike, Y. Hayashi, J. Hamada, S. Suzuki, A. Ooi, M. Noda, Y. Kamiyama, M. Kido, O. Lopatina, M. Hashii, S. Amina, F. Malavasi, E. J. Huang, J. Zhang, N. Shimizu, T. Yoshikawa, A. Matsushima, Y. Minabe and H. Higashida, 2010, "Two genetic variants of CD38 in subjects with autism spectrum disorder and controls," *Neuroscience Research*, 67: 181-91.
- Remijn, G.B., Kikuchi, M., Yoshimura, Y., Shitamichi, K., Ueno, S., Nagao, K., Munesue, T., Kojima, H., Minabe, Y., 2011, "Hemodynamic responses to visual stimuli in cortex of adults and 3- to 4-year-old children," *Brain Research*, 1383: 242-51.

- Suda, S., Iwata, K., Shimmura, C., Kamenno, Y., Anitha, A., Thanseem, I., Nakamura, K., Matsuzaki, H., Tsuchiya, K.J., Sugihara, G., Iwata, Y., Suzuki, K., Koizumi, K., Higashida, H., Takei, N., Mori, N., 2012, "Decreased expression of axon-guidance receptors in the anterior cingulate cortex in autism," *Molecular Autism*, 2(1): 14.
- Suzuki, K., Sugihara, G., Ouchi, Y., Nakamura, K., Tsujii, M., Futatsubashi, M., Iwata, Y., Tsuchiya, K.J., Matsumoto, K., Takebayashi, K., Wakuda, T., Yoshihara, Y., Suda, S., Kikuchi, M., Takei, N., Sugiyama, T., Irie, T., Mori, N., 2011, "Reduced acetylcholinesterase activity in the fusiform gyrus in adults with autism spectrum disorders," *Archives of General Psychiatry*, 68(3): 306-13.
- Tanabe, H.C., Kosaka, H., Saito, N.D., Koike, T., Hayashi, M.J., Izuma, K., Komeda, H., Ishitobi, M., Omori, M., Munesue, T., Okazawa, H., Wada, Y., Sadato, N., 2012, "Hard to "tune in": neural mechanisms of live face-to-face interaction in individuals with high-functioning autistic spectrum disorder," *Frontiers in Human Neuroscience*.
- Tochimoto, S., Kurata, K., Munesue, T., 2011, "'Time slip' phenomenon in adolescents and adults with autism spectrum disorders: case series," *Psychiatry Journal of Clinical Neuroscience*, 65: 381-3.
- Ueno, S., Okumura, E., Remijn, G.B., Yoshimura, Y., Kikuchi, M., Shitamichi, K., Nagao, K., Mochiduki, M., Haruta, Y., Hayashi, N., Munesue, T., Tsubokawa, T., Oi, M., Nakatani, H., Higashida, H., Minabe, Y., 2012, "Spatiotemporal frequency characteristics of cerebral oscillations during the perception of fundamental frequency contour changes in one-syllable intonation," *Neuroscience Letters*, 515(2): 141-146.
- Yoshimura, Y., Kikuchi, M., Shitamichi, K., Ueno, S., Remijn, G.B., Haruta, Y., Oi, M., Munesue, T., Tsubokawa, T., Higashida, H., Minabe, Y., 2012, "Language performance and auditory evoked fields in 2- to 5-year-old children," *European Journal of Neuroscience*, 35: 644-50.

### 5-3. 口頭発表

- ① 招待講演 (国内会議 10 件、国際会議 13 件)

#### 国内会議

- 菊知充, 「特別講演: 幼児の脳機能結合と発達の関係」『第 34 回 F m θ 研究会』梅田スカイビル (大阪), 2012 年 3 月 24 日.
- 東島仁, 『北陸科学コミュニケーション・アウトリーチ研究会』ヴィアイン金沢 (石川), 2010 年 6 月 20 日.
- 東田陽博, 「CD38 で調節される社会性行動とオキシトシン分泌」『第 87 回日本生理学会大会』盛岡市民文化ホール (岩手), 2010 年 5 月 20 日.
- 東田陽博, 「発達障害治療薬の現状と展望」『第 40 回日本神経精神薬理学会』仙台国際センター (岩手), 2010 年 9 月 15 日.
- 東田陽博, 「A missense mutation in CD38 associated with autism spectrum disorder and oxytocin treatment」『第 34 回日本神経科学大会』パシフィコ横浜 (神奈川), 2011 年 9 月 15 日.
- 東田陽博, 「自閉症とオキシトシン、CD38 の関連について」『第 54 回日本小児神経学会総会』ロイトン札幌 (北海道), 2012 年 5 月 18 日.

- 東田陽博, 「社会性認識記憶、CD38、オキシトシン、と自閉症」『第 59 回日本実験動物学会総会』別府国際コンベンションセンター (大分), 2012 年 5 月 25 日.
- 東田陽博, 「CD38 and autism spectrum disorders」『第 55 回日本神経化学学会大会』神戸国際会議場 (兵庫), 2012 年 9 月 30 日.
- 東田陽博・棟居俊夫, 「APSN/JSN-JSBP Joint Symposiym : 広汎性発達障害の過去、現在、未来 : CD38 と自閉症スペクトラム障害」『第 34 回日本生物学的精神医学会』神戸国際会議場 (兵庫), 2012 年 9 月 30 日.
- 三邊義雄, 「2-5 歳児の脳内機能結合と言語発達」『子どものこころの発達研究センター 平成 23 年度研究発表会』大阪, 2012 年 1 月 18 日.

#### 国際会議

- Higashida, H., "Social behavior and oxytocin secretion in the brain regulated by CD38 in mice," *The 4th International Workshop on Biomedical Imaging Fukui 2010*, Fukui, January 25, 2010.
- Higashida, H., "Social behaviour and oxytocin secretion in the brain regulated by CD38 in human and mice," *Medical Pharmacology*, Cambridge (UK), February 24, 2010.
- Higashida, H., "CD38, oxytocin and autism," *V Russia-Japan Workshop on Neurosciences*, Krasnoyarsk (Russia) , July 5, 2010.
- Higashida, H., "Oxytocin and CD38 in social behaviors in the mouse and human," *VI Russia-Japan Workshop on Neurosciences*, Krasnoyarsk (Russia), July 5, 2010.
- Higashida, H., "CD38- and cyclic ADP-Ribose-Dependent oxytocin secretion and social behavior in mice and CD38 SNPs associated with autism in U.S. and Japanese subjects," *Department of Neuroscience 2010 Seminars & Presentations*, Thomas Jefferson university (Philadelphia, USA), October 7, 2010.
- Higashida, H., "CD38 and cyclic ADP-Ribose as regulators of oxytocin release and resulting social behavior and CD38 SNPs associated with autism in Japanese, Korean, and U.S. subjects," *2010 Kanazawa-Chonbuk Symposium*, Jeonju (Korea), October 28, 2010.
- Higashida, H., "Oxytocin and CD38 in social behaviors in the mouse and human," *10th World Congress of Biological Psychiatry*, Prague (Czech), May 30, 2011.
- Higashida, H., "Recent findings on social behaviors in CD38 or CD157 knockout mice," *2012 Jeju CD38 and NAD meeting*, Jeju-do (Korea), February 16, 2012.
- Higashida, H., "Neurobiology of autism and therapeutic approach by oxytocin," *Federal Meeting of Russian Pediatric Society*, Krasnoyarsk State Medical Academy (Russia), September 19, 2012.
- Minabe, Y., "Integrated neuroimage and neuroanatomical research of autism and schizophrenia," *Russia-Lapan Workshop on Neuroscience*, Krasnoyarsk (Russia), July 5, 2011.
- Miura, Y., "Revealing your mind by eye-tracking technology: a case on children with autism spectrum disorders," *Tobii Seminar*, Taipei (Taiwan), May 18, 2011.
- Takei, W., "Development of teaching materials to facilitate independence," *The 11th Asia Pacific Congress on Deafness 2012*, Grand Copthorne Waterfront Hotel Singapore (Singapore), July 28, 2012.
- Takei, W., "Future of deaf education," *The 11th Asia Pacific Congress on Deafness 2012*, Grand Copthorne Waterfront Hotel Singapore (Singapore), July 28, 2012.



② 口頭発表 (国内会議 23 件、国際会議 8 件)

国内会議

芦村和美・棟居俊夫・菊知充・三邊義雄・東田陽博, 「自閉症スペクトラム障害を対象としたオキシトシン臨床試験の国内外での状況」『第 181 回北陸精神神経学会』金沢大学附属病院宝ホール (石川), 2012 年 1 月 22 日.

大井学, 「『他者のための言語』欠如? : 高機能自閉症スペクトラム障害における語用障害の基底」『日本発達心理学会』神戸国際会議場 (兵庫), 2010 年 3 月 28 日.

菊知充・三邊義雄, 「広汎性発達障害の診断・治療・経過観察総合システムの開発」『ほくりく健康創造クラスター成果発表会』金沢日航ホテル (石川), 2010 年 9 月 3 日.

菊知充・渡邊克巳・鈴木道雄・春田康博・井上芳浩・三邊義雄, 「子どもに優しい脳発達研究プロジェクト:バンビプラン」『第 19 回海馬と高次脳機能学会』湯湧創作の森 (石川), 2010 年 11 月 20 日.

菊知充, 「脳の機能から見た精神症状と薬」『日本精神科看護協会講習会』石川県地場産業振興センター (石川), 2010 年 12 月 3 日.

菊知充・棟居俊夫・三邊義雄, 「2~5 歳児の脳内機能結合と言語発達、そして広汎性発達障害早期診断への試み」『第 20 回海馬と高次脳機能学会』金沢 (石川), 2011 年 10 月 9 日.

菊知充・三邊義雄, 「幼児の言語発達と脳機能結合: コヒーレンス解析による試み」『第 27 回日本生体磁気学会大会』東京電機大学千住キャンパス (東京), 2012 年 5 月 31 日.

菊知充・三邊義雄, 「MEG-NIRS 統合機の開発: 幼児への応用」『第 14 回ヒト脳機能マッピング学会』京王プラザホテル札幌 (北海道), 2012 年 7 月 6 日.

菊知充・三邊義雄, 「幼児用 MEG による未就学広汎性発達障害児の生理学的検討」『第 34 回日本生物学的精神医学会』神戸国際会議場 (兵庫), 2012 年 9 月 30 日.

菊池ゆひ・越後亮介・米田貢・長澤達也・三邊義雄, 「地域支援団体「心田開発」と精神科作業療法の連携」『第 181 回北陸精神神経学会』金沢大学附属病院宝ホール (石川), 2012 年 1 月 22 日.

工藤直志, 「白山市の保育所児童の保護者調査 (発達障害と共生社会に関する意識調査) 発達障害のある人びとに対する支援」『平成 24 年度白山市障害者等自立支援協議会拡大療育検討会議』白山市市民交流センター (石川), 2012 年 4 月 26 日

工藤直志, 「自閉症の医療化と社会問題化」『日本保健医療社会学会第 216 回定例研究会 (関西)』、大阪大学豊中キャンパス (大阪), 2012 年 6 月 30 日.

竹内慶至, 「自閉症と社会学—科学・医療化・コミュニケーション」『第 62 回関西社会学会大会』甲南女子大学 (兵庫), 2011 年 5 月 28 日.

竹内慶至, 「自閉症の医療化と社会問題化」『日本保健医療社会学会第 216 回定例研究会』大阪大学豊中キャンパス (大阪), 2012 年 6 月 30 日.

田邊浩, 「大学生の自閉症認識と社会観—『大学生の障害と病いに関する意識調査』より (1)」『第 62 回関西社会学会大会』甲南女子大学 (兵庫), 2011 年 5 月 28 日.

田邊浩, 「白山市市民調査と保護者調査の分析—発達障害と共生社会に関する意識調査のデータ分析から」『白山市障害者等自立支援協議会療育検討会議』白山市市民交流センター (石川), 2012 年 4 月 26 日.

田邊浩, 「発達障害のある人びとに対する支援、関わりの意識・調査データの分析から」『平成 24 年度白山市障害者等自立支援協議会拡大療育検討会議』白山市市民交流センター (石川), 2012 年 4 月 26 日.

東島仁・高橋貴哲・大井学・加藤和人, 「自閉症スペクトラム障害の遺伝的側面の研究が家

族にもたらず倫理・社会的課題の検討」『日本人類遺伝学会第 55 回大会』大宮ソニックシティ（埼玉），2010 年 10 月 28 日。

東島仁・高橋可江・中村征樹ほか（自閉症にやさしい社会の実現に向けた金沢会議 2010「自閉症を巡る科学と社会の対話」企画委員会）、「自閉症にやさしい社会の実現に向けた対話の取り組み」『サイエンスアゴラ 2010』日本科学未来館他（東京），2010 年 11 月 20-21 日。

松田洋介，「自閉症認識と教育ガバナンスの再編—『大学生の障害と病いに関する意識調査』より（2）」『第 62 回関西社会学会大会』甲南女子大学（兵庫），2011 年 5 月 28 日。

三邊義雄・菊知充・棟居俊夫，「2-5 歳児の脳内機能統合と言語発達」『第 38 回日本脳科学会』沖縄県市町村自治会館（沖縄），2011 年 10 月 8 日。

村松朋子・棟居俊夫，「ロールシャッハ・テストから見た双極性障害と自閉症スペクトラム障害との関連性」『第 38 回日本脳科学会』沖縄県市町村自治会館（沖縄），2011 年 10 月 8 日。

米田英嗣・小坂浩隆・齋藤大輔・猪原敬介・棟居俊夫・岡沢秀彦，「高機能自閉症スペクトラム成人の物語理解」『日本自閉症スペクトラム学会第 10 回記念研究大会』名古屋国際会議場（愛知），2011 年 9 月 11 日。

#### 国際会議

Higashijima, J., “Scientific advancement and society: the autism spectrum disorders' case in Japan,” *Society for Social Studies of Science/ Japanese Society for Science and Technology Studies 2010 annual meeting*, Tokyo University, Tokyo, Japan. August 26, 2010.

Komeda, H., Kosaka, H., Saito, D.N., Mano, Y., Fujii, T., Yanaka, H., Munesue, T., Okazawa, H., “Self-related representation in individuals with high-functioning autism,” *International Meeting for Autism Research 2012*, Sheraton Centre Toronto (Canada), May 17, 2012.

Minabe, Y., “Bambi plan: project with NIRS/MEG integrated device for the early detection of autism spectrum disorder in preschool children,” *Symposium in Chonbuk University*, Chonbuk (Korea), October 28, 2010.

Miura, Y., “How do children know speaker's knowledge ability from utterances?: findings from cross-linguistic and cross-clinical studies,” *The 12th International Pragmatics Conference*, Manchester (United Kingdom), July, 7, 2011.

Oi, M., “Language and mind in autism: a perspective to relate the triad of autism to social brain hypothesis,” *International Conference on social brain: Autism and neuroethics*, Kanazawa, March 24, 2010.

Oi, M., “What is being multilingual like for individuals with autism?: exploring twice multiculturalism,” *The First Workshop on Multilingual Development, Education, and Intervention in Japan*, Tokyo, November 13, 2010.

Shibata, M., “Brief introduction on neuroethics,” *International Conference on social brain: Autism and neuroethics*, Kanazawa, March 24, 2010.

Yokoyama, S., Ma, W-J., Hashii, M., Munesue, T., Higashida, H., “Amino acid polymorphism of the human oxytocin receptor, R376G/C alter receptor recycling and phospholipase C-mediated Ca<sup>2+</sup> signaling,” *Roche – Nature Medicine Translational Neuroscience Symposium 2012*, Bounas, (Switzerland), April 24, 2012.

③ ポスター発表 (国内会議 6 件、国際会議 13 件)

国内会議

- 綾野鈴子・榎藤桂子・大井学・田中早苗, 「子どものコミュニケーションチェックリスト (CCC-2) 日本語版結果の評定者間比較に関する一考察」『第 38 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会』県立広島大学三原キャンパス (広島), 2012 年 5 月 12 日.
- 大井学・黄素芬, 「高機能自閉症スペクトラム障害の子供にみられる母親疑問詞質問応答困難は複数言語にまたがるか?」『第 37 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会』JA 長野県ビル (長野), 2011 年 5 月 29 日.
- 大井学・藤野博・田中早苗・長谷川千秋, 「子どものコミュニケーションチェックリスト (CCC-2) 日本語版の標準化: 定型小中学生」『第 37 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会』JA 長野県ビル (長野), 2011 年 5 月 29 日.
- 大井学・田中早苗・田口愛子, 「高機能自閉症スペクトラム障害児における皮肉・間接非難理解は定型発達児といかなる場合に異なるのか?」『第 37 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会』JA 長野県ビル (長野), 2011 年 5 月 29 日.
- 大井学・田中早苗・榎藤桂子・綾野鈴子・長谷川千秋, 「子どものコミュニケーションチェックリスト (CCC-2) 日本語版の標準化: 定型就学前児」『第 38 回日本コミュニケーション障害学会学術講演会』県立広島大学三原キャンパス (広島), 2012 年 5 月 12 日.
- 武居渡, 「手話使用状況からみた聴覚障害児の言語力—感覚器障害戦略研究で得られたデータの分析」『日本発達心理学会第 23 回大会』名古屋国際会議場 (愛知), 2012 年 3 月 10 日.

国際会議

- Gondo, K., Matsui, T., Yanagisawa, R., Li, H., Oi, M., “Does being Japanese-English bilingual affect language development in children with autism?” *International Meeting for Autism Research*, Sheraton Centre Toronto (Canada), May 18, 2012.
- Higashida, H. and O. Lopatina, “Mate-dependent paternal parental behavior depends on oxytocin and CD38 in ICR mice,” *Parental Brain: Neurobiology, Behaviour and the Next Generation*, Edinburgh (U.K.), September 3, 2010.
- Higashida, H., “Single nucleotide polymorphisms of CD38 and oxytocin treatment for 6 subjects with autism spectrum disorders,” *9th World Congress on Neurohypophysial Hormones*, Boston (U.S.A.), July 29, 2011.
- Higashida, H., “An oxytocin receptor gene polymorphism found in autistic patients impairs receptor internalization and signal transduction,” *9th World Congress on Neurohypophysial Hormones*, Boston (U.S.A.), July 29, 2011.
- Higashijima, J., Takahashi, K., Oi, M., and Kato, K., “Ethical implications emerging from research into the genetic and genomic aspects of autism spectrum disorders: A qualitative study of parental opinions in Japan,” *The American Society of Human Genetics 2010 Annual Meeting*, Washington DC, United States of America, November 4, 2010.
- Kikuchi, M., Munesue, T., Higashida, H., Minabe, Y., “Lateralized theta wave MEG coherence and language performance in 2- to 5-year-old children,” *Exploring autism research collaboration between Japan and United States: Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders*, Nippon Zaidan Building (Tokyo), December 2, 2011.
- Li, H., Huang, S-F., Oi, M., “Family communication of a HFASD child in a Japanese-English-Chinese environment: mother’s code switching and code mixing,” *14th*

*Annual Conference of the International Clinical Phonetics and Linguistics Association (ICPLA)*, University College Cork (Ireland), July 28, 2012.

Miura, Y., Matsui, T., Fujino, H., Osanai, H., Tojo, Y., "Autistic children's understanding of prosody: evidence from eye-tracking," *Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders*, Nippon Zaidan Building (Tokyo), December 2, 2011.

Miura, Y., Matsui, T., Tojo, Y., Osanai, H., "Expression of feeling of knowing in the speech of autistic children," *The 12th International Congress for the Study of Child Language*. Montreal (Canada), July 23, 2011.

Miura, Y., Nakayama, A. & Heffernan, N., "Foreign language activities for Japanese students in special needs education," *Insights into applied linguistics: languaging, agency, and ecologies*, University of Jyväskylä (Finland), June 5, 2012.

Miura, Y., Matsui, T., Fujino, H., Tojo, Y., Osanai, H., "Autistic children's sensitivity to vocal affect when finding the speaker's face and referent," *14th Annual Conference of the International Clinical Phonetics and Linguistics Association (ICPLA)*, University College Cork (Ireland), July 29, 2012.

Munesue, T., Muramatsu, T., Kikuchi, M., Higashida, H., Minabe, Y., "Similarities in rorschach inkblot scores between patients with autism spectrum disorders and bipolar disorders," *Joint Academic Conference on Autism Spectrum Disorders*, Nippon Zaidan Building (Tokyo), December 2, 2011.

Nagao, K., and T. Munesue, "A study on the relation between factor indices of WISC-III and symptoms of ASD children evaluated by PARS," *19th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions*, Beijing (China), June 2-6, 2010.

#### 5-4. 新聞報道・投稿、受賞等

##### ① 新聞報道・投稿

北國新聞、2009年9月4日、朝刊21面、「社会技術事業に採択：金大『自閉症にやさしい社会』」  
読売新聞、2009年9月4日、朝刊、「『自閉症にやさしい社会』科学技術振興機構の研究開発事業に採択」

北陸中日新聞、2009年9月4日、朝刊、「自閉症に優しい社会テーマ 金大の研究事業採択」

北國新聞、2009年11月8日、朝刊23面、「自閉症研究の取り組み紹介：金大市民講座」

北陸中日新聞、2010年1月7日、朝刊、「自閉症社会で支えよう」

北國新聞、2010年1月8日、朝刊17面、「自閉症に優しい学校や職場探る」

北國新聞、2010年3月15日、朝刊16面、「自閉症を考える：金沢でサイエンスカフェ」

北陸中日新聞、2010年4月1日、朝刊、「自閉症理解へ話し合う集い 6日に金大」

北陸中日新聞、2010年4月7日、朝刊、「ひらめく？図書館カフェ：金大角間キャンパス」  
毎日新聞、2010年4月24日、「自閉症：オキシトシン投与で知的障害者の症状改善 金沢大」

中日新聞、2010年4月24日、「ホルモン『オキシトシン』で自閉症改善 浜松医科大などの研究グループが発表」

北國新聞、2010年4月24日、朝刊、「ホルモンの自閉症改善：金沢大教授らが発表」

北陸中日新聞、2010年4月24日、朝刊、「女性ホルモン 自閉症を改善」

読売新聞、2010年4月24日、朝刊、「女性ホルモン 自閉症治療に効果」

読売新聞、2010年5月27日、「大学の実力 発達障害（1）」

北國新聞、2010年6月3日、朝刊、「自閉症、市民参加で語る 金大がサイエンスカフェ」

北陸中日新聞、2010年6月17日、朝刊、「自閉症理解へ 月1回『カフェ』 金沢で22日」

北陸中日新聞、2010年6月23日、朝刊、「カフェで自閉症語る」

北陸中日新聞、2010年7月21日、朝刊、「自閉症会議の市民委員募集」

北國新聞、2010年8月23日、朝刊、「自閉症を語り合う」

北國新聞、2010年10月4日、朝刊、「自閉症、市民参加で語る」

北國新聞、2010年10月18日、朝刊、「自閉症に優しい社会へ意見交換」

北陸中日新聞、2010年10月22日、朝刊、「発達障害の学生が倍増 全国4年制大2009年度調査」

読売新聞、2010年11月16日、北陸版朝刊、「自閉症者の就労支援提言『やさしい社会へ』 会議閉幕」

読売新聞、2010年11月26日、北陸版朝刊、「障害と資質は裏表 金大子どものころサミット」

北日本新聞、2010年12月29日、朝刊、「バンビプラン 子どもの発達を診断」

北陸中日新聞、2011年1月1日、朝刊、「金沢にモデル地区構想：発達障害 市民、企業がサポート」

読売新聞、2011年1月7日、朝刊「見えない障害（上）共生へ適応に協力の輪」

日本教育新聞、2011年3月14日、「私立 木の花幼稚園 キラキラ会（金沢市）障害児の親同士が本音を語り育ち合う」

北陸中日新聞、2011年6月6日、朝刊11面、「シリーズ『現場』自閉症理解深まる 家族との関係改善成果着実に サイエンスカフェ1年研究者と月1回意見交換」

北國新聞、2011年6月27日、朝刊17面、「発達障害児の指導 教諭らが理解深め ことば育む親の会」

北國新聞、2011年7月9日、朝刊17面、「発達障害に支援を 大学コンソーシアム」

北陸中日新聞、2011年7月16日、朝刊18面、「市が専門家新チーム 発達障害の子ども支援 療育や生活自立へ助言」

北陸中日新聞、2011年8月2日、朝刊14面、「三浦金大特任助教 自閉症研究に助成 明治安田健康財団」

北國新聞、2011年8月2日、朝刊4面、「金大特任助教三浦氏に助成 明治安田財団」

北陸中日新聞、2011年8月26日、朝刊1面、「認知症診断初期でも的確 簡単テスト『手の形』で記憶試し」

北國新聞、2011年9月11日、朝刊34面、「自閉症で意見交換」

北國新聞、2011年10月6日、朝刊37面、「ホルモンで自閉症治療 文科省『脳プロ』採択 金大などが臨床試験」

北陸中日新聞、2011年10月6日、朝刊26面、「シリーズ『つなごう医療』自閉症をホルモン治療世界初、金大で臨床へ5大学合同、年明けにも」

朝日新聞、2011年10月12日、朝刊32面、「社会性障害 克服に焦点」

北國新聞、2011年10月14日、朝刊20面、「自閉症に理解深める 中村信一学長、人間社会研究域学校教育系・大井学教授、医薬保健研究域医学系・東田陽博教授」

北陸中日新聞、2011年10月19日、夕刊6面、「『ほくりく健康創造クラスター』幼児あやす工夫重ねる 測定環境づくり高い評価 言葉と左脳の関係実証」

北國新聞、2011年10月19日、夕刊6面、「『ほくりく健康創造クラスター』幼児の脳機能5分で検査 発達障害の早期診断へヘルメットで磁界測定 金大、産学連携で新機器」

北陸中日新聞、2011年10月19日、夕刊1面、「『ほくりく健康創造クラスター』左脳活発

な子より言語発達 発達障害早期診断に道世界初の実証」  
 北日本新聞、2011年10月20日、朝刊31面、「『ほくりく健康創造クラスター』5分で脳機能検査 幼児対象の手法開発」  
 北國新聞、2011年10月20日、28面、「『ほくりく健康創造クラスター』左脳活発な子言語も発達 障害早期診断へ道 世界初の実証」  
 北國新聞、2011年10月20日、朝刊36面、「幼児の脳機能5分で簡単検査 発達障害早期診断に道『ほくりく健康創造クラスター』産学連携金大が手法開発」  
 毎日新聞、2011年10月20日、朝刊25面、「『ほくりく健康創造クラスター』楽しく簡単に脳機能検査 幼児用脳磁計」  
 北陸中日新聞、2011年10月20日、朝刊16面、「『ほくりく健康創造クラスター』幼児に人気の映像活用 左脳と言語関係を実証 測定しやすく工夫」  
 北國新聞、2011年10月24日、朝刊2面、「脳磁計は着実な歩みの証し 健康創造クラスター」  
 朝日新聞、2011年12月14日、朝刊34面、「子に優しい測定機開発」  
 北國新聞、2012年1月29日、朝刊17面、「県『発達障害の基礎講座』」  
 朝日新聞、2012年2月1日、「ロボットにも心の実現を いしかわスクエア・金沢大学探訪23」  
 北國新聞、2012年3月16日、朝刊1面、「発達障害 脳の活動場所に違い」  
 北國新聞、2012年3月17日、朝刊22面、「子どもの発達障害最新の研究に理解 金大『サミット』」  
 北陸中日新聞、2012年3月17日、朝刊18面、「子どもの発達障害最新の研究に理解 金大『サミット』」  
 北國新聞、2012年3月19日、朝刊17面、「自閉症テーマに議論『第2回金大子どものころサミット』」  
 北陸中日新聞、2012年4月2日、朝刊1面、「自閉症に優しい社会を」  
 北陸中日新聞、2012年5月17日、朝刊1面、「発達障害者の積極雇用に道」  
 北陸中日新聞、2012年5月17日、朝刊29面、「空気が読めない？（上）」  
 北陸中日新聞、2012年6月12日、朝刊17面、「自閉症と向き合おう」  
 北陸中日新聞、2012年6月19日、朝刊、「自閉症支援策 市民から提言」  
 北國新聞、2012年6月29日、夕刊6面、「あなたの隣の自閉症」  
 北國新聞、2012年7月16日、朝刊16面、「金大2教員が研究紹介」  
 北陸中日新聞、2012年7月16日、朝刊12面、「自閉症に優しい街へ」  
 北陸中日新聞、2012年7月30日、朝刊9面、「自閉症支援来月提言」  
 北陸中日新聞、2012年9月28日、朝刊18面、「障害の早期発見と就労への橋渡しなど 自閉症の未来協市長に提言」

## ② 受賞

東田陽博、平成22年度金沢市文化賞・産業功労賞、2010年11月1日。

東田陽博、平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰 科学技術賞（研究部門）、「自閉症の社会性障害の神経内分泌学の研究」、2012年4月17日。

河合隆平、社会事業史学会・第2回吉田久一研究奨励賞、2011年5月。

## ③ その他

### 【テレビ放送】

日本放送協会、2012年3月17日、「発達障害 脳の活動部分に違い」

日本放送協会、2012年7月30日、「自閉症来月市民提言へ」  
日本放送協会、2012年9月27日、「自閉症の人支援を要望」

【ラジオ放送】

大井学、2010年5月2日、ラジオ金沢 FM 78.0MHz、スペシャルプログラム「Golden まるびい on “ザ・ラジオ”」出演（金沢 21 世紀美術館・秋元館長と「自閉症と美術のかかわり」について対談）

【雑誌掲載】

日経サイエンス 8月号（vol.40）、2010年6月25日、「自閉症についてカフェで語ろう」

5-5. 特許出願

① 国内出願 （ 0 件）

② 海外出願 （ 1 件）

DIAGNOSIS AND TREATMENT OF AUTISM USING CD38、Higashida Haruhiro、  
2011年2月3日、12/312,505（米国）[登録手続進行中]